

# 箱崎 34

- 箱崎遺跡第54次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第998集

2008

福岡市教育委員会

はこざき  
箱崎 34

- 箱崎遺跡第54次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第998集



遺跡略号 HKZ-54  
調査番号 0643

2008

福岡市教育委員会





第Ⅲ面東半部全景（西から）



SX144





SD07 上部（西から）



SD07 土層断面（西から）







## 序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術や文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、各時代とも重要視されているところです。

本調査地点は博多遺跡群と並び、中世における国際貿易都市として全国でも特に繁栄を極めた箱崎遺跡群に含まれています。今回の調査では都市の地割の基準となる溝が発見されたことや寺院の性格を示す瓦片が多く出土した事などが特に注目されます。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山 田 裕 嗣

## 例　　言

- 本書は福岡市東区馬出5丁目95他地内において福岡市教育委員会が2006年度に実施した発掘調査報告書である。
- 調査は荒牧宏行が担当し、遺構図面は藤野雅基、荒牧が作成し、遺構写真撮影は荒牧が行った。
- 本書に掲載した遺物実測は濱石正子、平川敬治、相原聰子、荒牧、浄書は濱石正子、大石菜美子、相原聰子、荒牧、遺物写真撮影は荒牧が行った。
- 本文は荒牧が執筆、編集した。
- 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた全ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、公開・活用されていく予定である。

## 凡　　例

- 本書掲載の遺構図座標、方位は旧日本測地系（第II系）による。方位は真北より $0^{\circ} 19'$  西偏する。
- 掲載した遺物は土器、石器、金属器等の各種別に通し番号を付した。

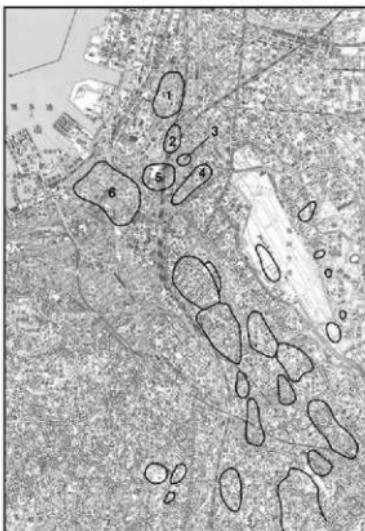
遺跡調査番号	0643		遺跡略号	HKZ-54	
地番	東区馬出5丁目95他		分布地図番号	箱崎34	
開発面積	3.920m <sup>2</sup>	調査対象面積	約600m <sup>2</sup>	調査面積	333m <sup>2</sup>
調査期間	平成18年10月26日～平成19年2月28日				

# 本文目次

Iはじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の方法と経過	1
3. 調査体制	1
II位置と環境	1
1. 地形	1
2. 歴史的環境	2
III調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 土層	5
3. 遺構と遺物	5
(1) 第I面の調査	5
(2) 第II面の調査	7
溝(SD)	7
井戸(SE)	14
土壙(SK)	23
出土鉄器	42
銅錢	42
出土瓦	44
出土遺物観察表	46
IV終わりに	50

## 挿図目次

Fig. 1 箱崎遺跡群と周辺遺跡 (1/10万) … 目次	
Fig. 2 54次調査地点 (1/1,000) ..... 2	
Fig. 3 箱崎遺跡群調査地点 (1/5,000) ..... 3	
Fig. 4 調査区北壁土層断面 (1/60) ..... 4	
Fig. 5 第II面遺構配置図 (1/100) … 折り込み	
Fig. 6 第III、IV面遺構配置図 (1/100)	
..... 折り込み	
Fig. 7 SD07上層溝環群 ..... 10	
Fig. 8 SD07、507、508上層 (1/40) ..... 12	
Fig. 9 SD07上層溝出土遺物実測図 (1/4) ..... 13	
Fig.10 SD507、508出土遺物実測図 (1/4) ..... 14	
Fig.11 SE03、121、185、187実測図 (1/80)	
..... 15	
Fig.12 SE03、121、185出土遺物実測図 (1/4)	
..... 16	
Fig.13 SE485、605、606、672実測図 (1/80)	
..... 17	
Fig.14 SE485、605、606、672出土遺物 実測図 (1/4) ..... 18	
Fig.15 SE514、515、516実測図 (1/80) ..... 19	
Fig.16 SE514、515、516出土遺物実測 (1/4)	
..... 21	
Fig.17 SE650実測図 (1/80) ..... 22	
Fig.18 SX71実測図 (1/20) ..... 23	
Fig.19 SX71出土遺物実測図 (1/4) ..... 24	
Fig.20 土壌実測図 (SK15、63、57、681、 749、1/40) ..... 25	
Fig.21 SK15出土遺物実測図 (1/4) ..... 26	
Fig.22 SK50、144実測図 (1/40) ..... 27	
Fig.23 SK191実測図 (1/40) ..... 28	
Fig.24 SK191出土遺物実測図 (1/4) ..... 28	
Fig.25 土壌実測図 (SK519、740、501、718、 731、502 1/40) ..... 29	
Fig.26 第II面検出SX95 (SX197上部)、SX103 (SX191上部) 実測図 (1/40) ..... 33	
Fig.27 第II～IV面土壤出土遺物実測図1 (1/4)	
..... 34	
Fig.28 第II～IV面土壤出土遺物実測図2 (1/4)	
..... 35	
Fig.29 SK64、135、147実測図 (1/40) ..... 36	
Fig.30 柱穴出土遺物実測図 (1/4) ..... 37	
Fig.31 第II面黒色包含層出土遺物実測図 (1/4) ..... 38	
Fig.32 第I面、第II面～IV面検出、 搅乱出土遺物実測図 (1/4) ..... 39	
Fig.33 SD202出土墨書き器実測図 (1/4) ..... 40	
Fig.34 出土鉄器実測図 (1/2) ..... 42	
Fig.35 出土銅錢拓影とX線撮影写真 ..... 43	
Fig.36 出土瓦タタキ拓影 (1/4) ..... 45	
Tab.1 出土銅錢一覧 ..... 43	
Tab.2 出土遺物観察表 ..... 46	



1 箱崎遺跡群 2 吉塚町遺跡群  
3 吉塚祝町遺跡群 4 吉塚遺跡群  
5 堅粕遺跡群 6 博多遺跡群

Fig.1 箱崎遺跡群と周辺遺跡 (1/10万)

## I はじめに

### (1) 調査に至る経過

平成10年6月24日、福岡市土木局東部建設第1課より都市計画事業に基づく「馬出・東浜線」道路整備事業に伴い福岡市東区馬出・箱崎地内における「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」の文書が埋蔵文化財課に提出された。当課でこれを受理し、書類審査、確認調査を実施して遺跡の範囲を確認するとともに協議に入った。統いて買収等の諸条件が整い次第、発掘調査を行い、本調査区西側に隣接する第47次調査は平成16年7月20日から平成17年4月15日まで実施した。

今回の第54次調査は平成18年10月26日から開始し、平成19年2月28日に終了した。

### (2) 調査の方法と経過

調査区は住宅街を通る道路建設予定地であるために、調査に先立ち外周に防塵用の幕を設置した。調査は廃土処理を調査区内で行う必要から調査区を反転し廃土を置き換えながら進めていった。

47次調査の土層や表土剥ぎ時の土層から遺構面としては少なくとも3面が明確に判別できるが、調査期間の制約から多くの遺物や礎板の石材が柱穴に設けられた黒色包含層をバックホーで少しづつ下げていった。しかし、後述するように、白磁碗を6枚重ねたSX71にあたり、破壊したために、この面での遺構検出と人力による掘り下げを行うことにした。そのため調査期間は厳しいものとなったが、箱崎遺跡で検出されにくい中世後半期の遺構（SD07の上層溝等）や古代から中世にかけて多くの優れた陶磁器、この地区の性格を知る上で重要な資料となる瓦当片を得ることができた。

### (3) 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

【調査主体】福岡市教育委員会 【調査総括】埋蔵文化財第1課長 山口譲治 調査係長 山崎龍雄 【庶務】文化財管理課 鈴木由喜 【確認調査・協議】事前審査係長 濱石哲也 担当 星野恵美 【調査担当】荒牧宏行 【調査作業員】高手興志子 指原始子 中野裕子 田中フキ子 阿部幸子 藤澤義一 保坂由美子 花田昌代 井上ヨシ子 崎村雄介 竹原吉秋 中山洋治朗 松村和枝 井上澄敏 安藤建典 【資料整理】濱石正子 松下伊都子 大石菜美子 相原聰子 橋口久美子 福島真理子 中山順子 庄島さよ子

## II 位置と環境

### 1. 地形

箱崎遺跡群は中世の国際都市として繁栄を極めた博多遺跡群の北西約1.5kmに位置する。地形も博多遺跡群と同じく丘堤列（砂丘上）に立地している。

Fig.5は地山の砂丘レベルを示したものであるが、菅崎宮を頂点にして東に25°前後振れて延びている。この方位は現在の大学通りをはじめ町並みと合致し、遡る時期の町割りに地形的な要因が大きく影響していることが考えられる。

この標高約2m～3.5mの浜堤列は略南北800m、東西500mに及んで織まり、南側の今回調査地点を含めた馬出・東浜線予定地に鞍部がみられ、砂丘列はさらに南側の馬出町へ延びている。現在、箱崎遺跡群として登録されている範囲は略南北約1kmに及ぶ。また、東側の蛇行する宇美川一帯にはラグー

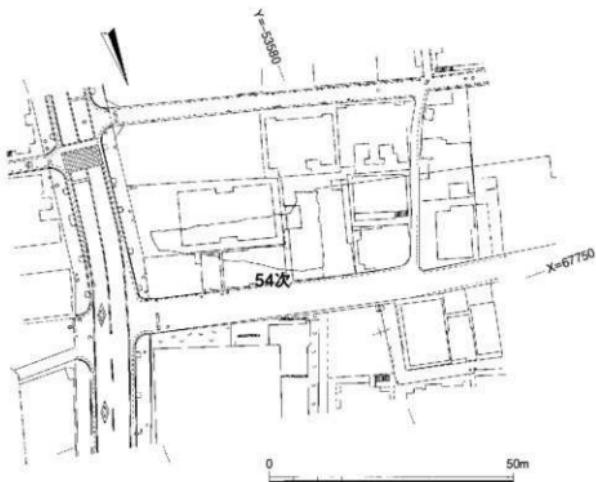


Fig.2 54次調査地点 (1/1,000)

ンが広がり、西側約150mの位置には海岸線が近い元寇防壁の推定ラインが延びている。

## 2. 歴史的環境

諸書にも書かれているように箱崎遺跡群の都市としての発展は菅崎宮の創建にはじまる。その時期は穂波郡の大分宮から遷座・創建された延長元年（923）といわれる。律令体制下、菅崎宮と大宰府の密接な関係が文献からも知られるが、既往の調査から出土した瓦当などからも大宰府や鴻臚館との関係が読み取れつつある。保元六年（1140）に菅崎宮は大宰府の府領となつたが、律令体制が崩壊した文治元年（1185）には石清水八幡宮の別宮となる。この頃には博多遺跡群と同様に商人、綱首の活動が闊達となつてくるものと思われ、中国輸入陶磁器も多く出土しあはじめる。

（那珂郡と柏屋郡の都境）

本調査地点を含む「馬出・東浜線」の道路予定地は箱崎と馬出の町境であるが、かつては柏屋郡と那珂郡の都境となっていた。注目されるのは、この地点が1で概述したように地形的に区切られ、また、町並みの方向も異なることである。文書から菅崎宮は創建時には那珂郡に含まれていたことが判るが、その後、時期は不明であるが、柏屋郡に編入された。筑前国続風土記では後背湿地が埋め立てられた後ではないかというが、何れにせよ、町割りの形成やその変遷の手がかりがつかめる可能性がある地点といえる。

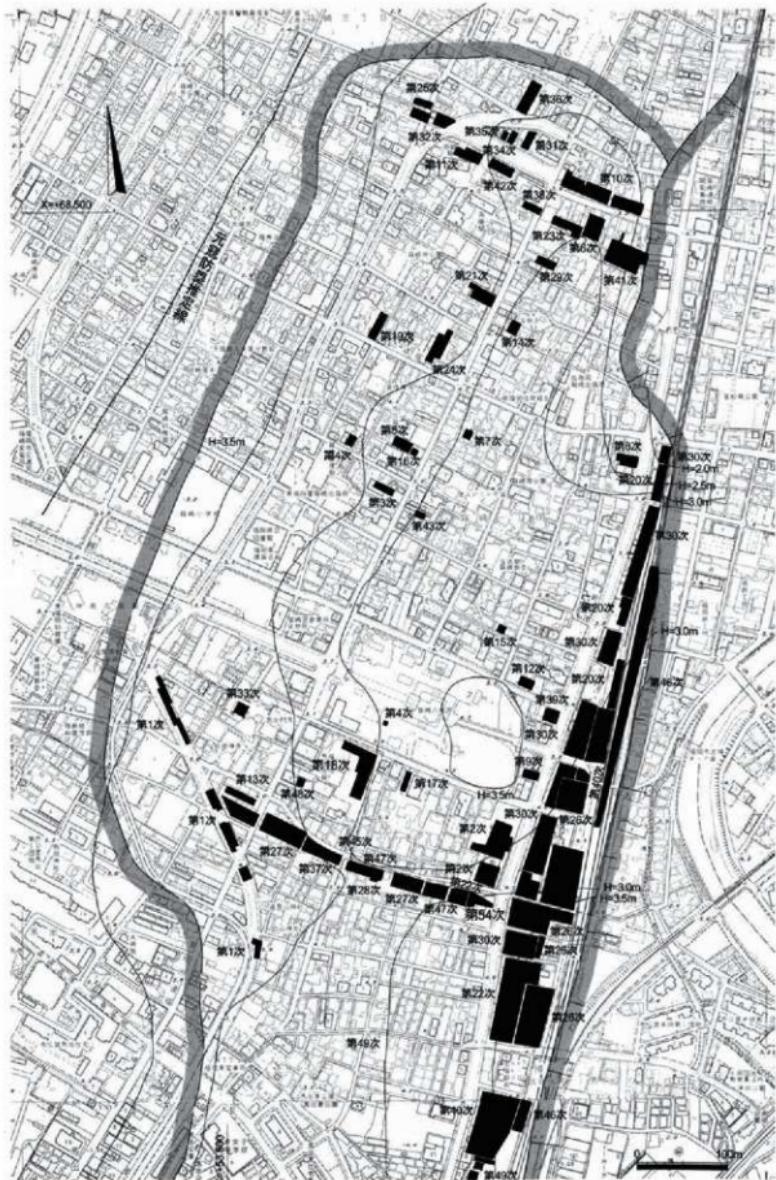


Fig.3 箱崎遺跡群調査地点 (1/5,000)

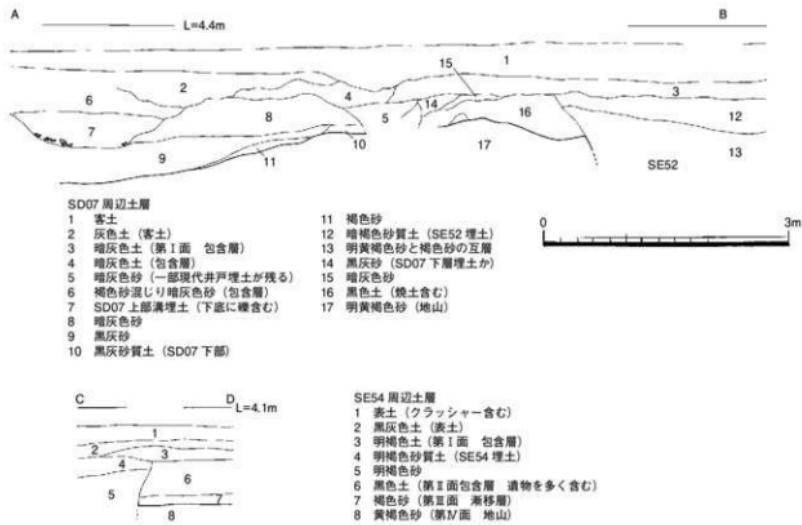


Fig4 調査区北壁土層断面 (1/60)



Ph.1 SD07土層（調査区南壁 西から）

### III 調査の記録

#### 1. 調査の概要

遺構検出面は4面確認できたが、第Ⅰ面は明確な遺構は識別できず暗渠のみ検出された。第Ⅱ面は黒色包含層上面のレベルで、検出された遺構の中で最も新しい時期と考えられる15世紀のSD07や井戸群、焼土壙等を検出した。第Ⅲ面では柱穴や土壙の識別が比較的容易となり、密度の濃く柱穴、土壙、井戸等を検出した。

第Ⅳ面は地山の砂丘層で第Ⅲ面で掘り残した遺構が検出されたものが多い。

出土遺物から10世紀から15世紀までの時期が考えられ、特に瓦の出土が多いことは性格を考察する上で注目される。また、検出された東西方向の溝は規模や3条が近接して平行することから町割り、郡境等の大きな基準になっていた可能性がある。

#### 2. 土層 (Fig.4, Ph.1)

現状は標高4.1mの平坦地に整地されている。客土は厚く20~50cmで整地されているので現状で地形を読み取ることは困難である。この現代客土層を除去すると灰色砂質土層が堆積し、この上面を第Ⅰ面とした。第Ⅱ面で検出したSD07もこの層位近くのレベルから掘り込まれていることが判るが、第Ⅰ面の検出では識別が困難であった。

第Ⅱ面はこの灰色第3層を除去した黒色包含層上面である。検出面の標高は3.3~3.4mである。この黒色包含層は東側で薄く、下層の褐色砂層第Ⅲ面がみえてくる。従って東側に高くなっていたことが判るが、調査区が狭まり断定はできないがこの第Ⅲ面の層位は南東部に高くなる傾向がみられる。

第Ⅱ面の遺構中、SD07をはじめとする東西溝や井戸群は明確に第Ⅱ面の黒色包含層を切っていることが識別できる。その他の柱穴、土壙等の多くはこの面から掘り込まれていることは不明瞭ながら識別できるが、形を露呈することは困難を極めるものが多い。また、この黒色包含層には焼土や焼土塊を埋土とした遺構が多くみられる。

第Ⅲ面は暗褐色砂層上面である。標高3.3~2.9mを測る。この層からは上層の黒色土に近い埋土の柱穴や土壙、井戸1基等が明確に識別できるようになり、密度濃い遺構を検出した。

第Ⅳ面は完全な地山層で明色の褐色砂層となる。標高3.0~2.8mを測る。この層位ではさらに明確に遺構を検出することが可能となる。第Ⅲ面で掘り残した遺構が大半と考えられるが、柱穴や土壙等を検出した。

#### 3. 遺構と遺物

##### (1) 第Ⅰ面の調査

2の土層の項で既述したが、現代整地層を除去した面である。灰色砂質土の面で、幅15~30cmの暗渠を検出した。特に東側では縦横に平行した多くの暗渠が識別できる。また、深いものがあり、第Ⅱ面でも検出できる。畑等の土地利用のために整地された層と考えられるが時期は不明である。この整地によって下層の遺構面が切られている。この面から掘り込まれた遺構は識別できなかったが、下層の第Ⅱ面の遺構として報告するSD07は調査区北壁の土層をみると近いレベルから掘り込まれていることが判る。



Ph.2 第Ⅱ面北東部全景（西から）



Ph.3 第Ⅲ面東半部全景（北西から）

## (2) 第Ⅱ面の調査

第Ⅱ面は調査区のほぼ全面に堆積していた黒色包含層上面の遺構検出面である。そのレベルは東端で標高3.4m、西端で標高3.3mを測り、西側に緩やかに傾斜している。また、東端でも南側が若干高く南東側へ高くなる可能性がある。

この黒色包含層中には部分的に焼土、焼土塊を多く含む。

### 溝 (SD)

全調査で4条の溝を検出した。その中で、略東西方向に平行して走行しているSD07、SD507、SD508は第Ⅱ面で検出することができた。なお、調査区東端で略南北方向に走行するSD202は第Ⅳ面で検出され、層位的にも古い時期と考えられる。

#### SD07 (SD06, 161, 512 Fig.4, 5, 8 Ph.1, 2, 6, 7)

調査区を略東西方向に走行する。その方向はN-73°-Wを向き、現在の町並み(N-78°-W)より若干東に振れている。なお、調査区北側の道路が、町境界(かつての郡境)となり、以北ではN-66°-Wの町並みとなっている。

調査ではSD07の上部の礫群の東側をSD06、礫群が途絶えた西側の延長をSD161、SD512として登録したが、結果的にSD07と同じ一連の溝であることが判明した。従って、遺物をはじめ調査資料は各名称で登録されているが、ここでは統べてSD07として報告する。

調査区のほぼ中央で第Ⅱ面の黒色包含層を明瞭に切るSE03、SE121を検出し、さらに両遺構を切った帯状に連なる礫群を検出した。調査を進めていく過程で、この礫群が幅1.4mで検出されたSD07の中央部に投げ込まれたものと判明した。礫群は拳大の小礫からなり、傾斜はほとんどみられず水平に近い。その機能は流れを安定させ溝の形状を保持するための捨石と考えられる。東側では連続するが、西側の強くグライ化した青灰色の砂混じりの粘土が埋土となったSX09付近で途絶える。調査では不整形のSX09はその形状や壁の立ち上がりが直に近いことからSD07が氾濫した痕跡若しくは水口状のものと考えたが、確定はできなかった。この不整形の落ち込みをSX09、131、133と登録したが、各落ち込みに明確な切り合い等は見出せなかった。

礫群中には9の備前鉢鉢や、2の朝鮮青磁も含まれ、上述の遺構の切り合い関係のほか出土遺物からも調査された遺構のなかでは最も新しい時期のものと判断できた。

SD07の下部には第Ⅲ面で検出された断面V字に掘削された溝が重複していることが確認された。従って、SD07は下層の断面V字溝を掘り直した可能性を含め踏襲されていたことが判る。

#### SD07下部

上述の上部の礫群が下底であった時期には下部の断面V字状の溝は埋没しているが、この下部溝の立ち上がりは第Ⅱ面の黒色包含層を切っている。その形状は上端近くで浅く緩やかな傾斜で広がり、逆に、下底近くでは幅50cmで突出した断面形に掘り下げられている。Fig.8 B-B'図は掘り直したような土層を示し、部分的に浚渫されたものか。なお、地山に近い第Ⅲ面で、両岸に上端から約1m幅の浅く、上端にむかって傾斜していく落ち込みを検出した。上部が氾濫した痕跡と思われる。

このようにSD07は規模や踏襲された継続期間からも、大区分の基準となっていた可能性がある。

#### 出土遺物 (Fig.9)

SD07出土遺物は総じてコンテナ(38×60×10cm)7箱分が出土した。出土地点は1~13がSD07、14、15がSD161、16~21がSD512であるが、既述の通り總てSD07の一連の溝からの出土である。SD07上層



Ph.4 第Ⅱ面西半部全景（北西から）



Ph.5 第Ⅲ面西半部全景（北西から）

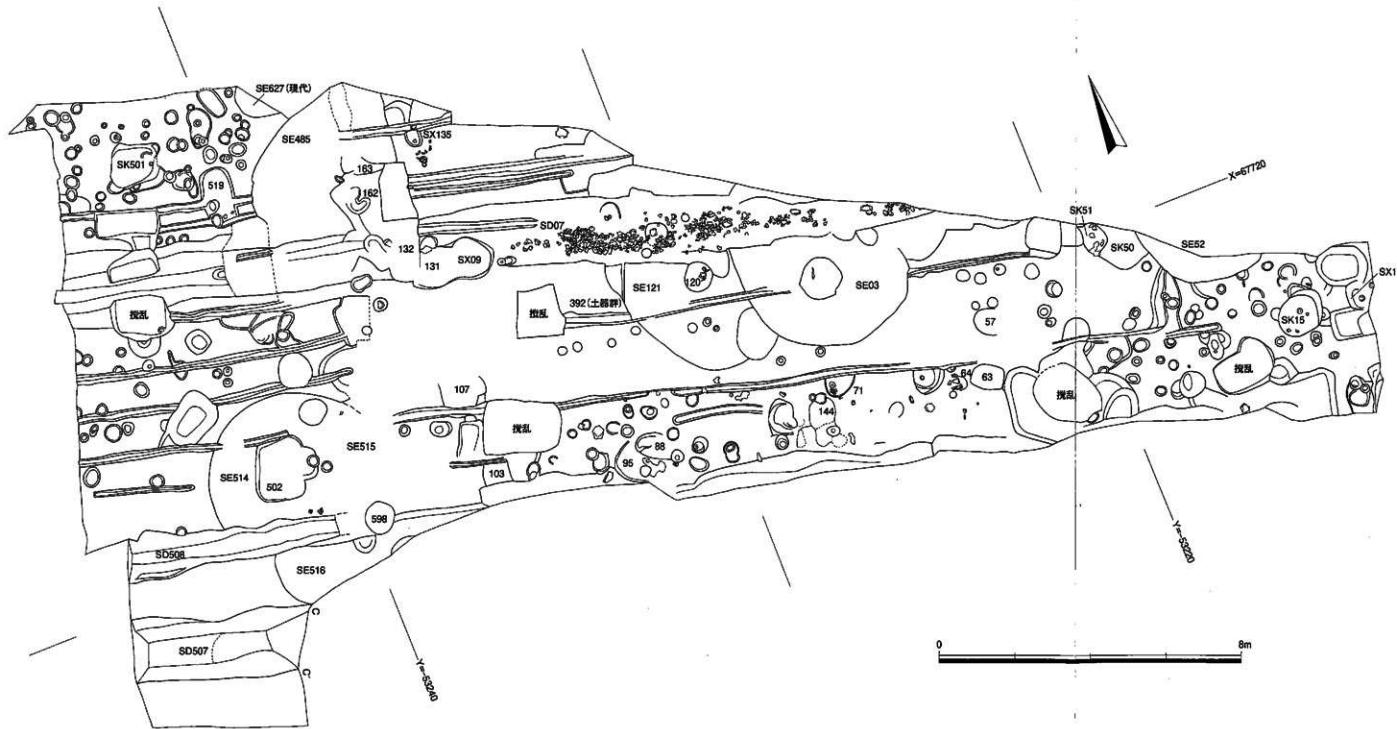


Fig.5 第Ⅱ面 遺構配置図(1/100)

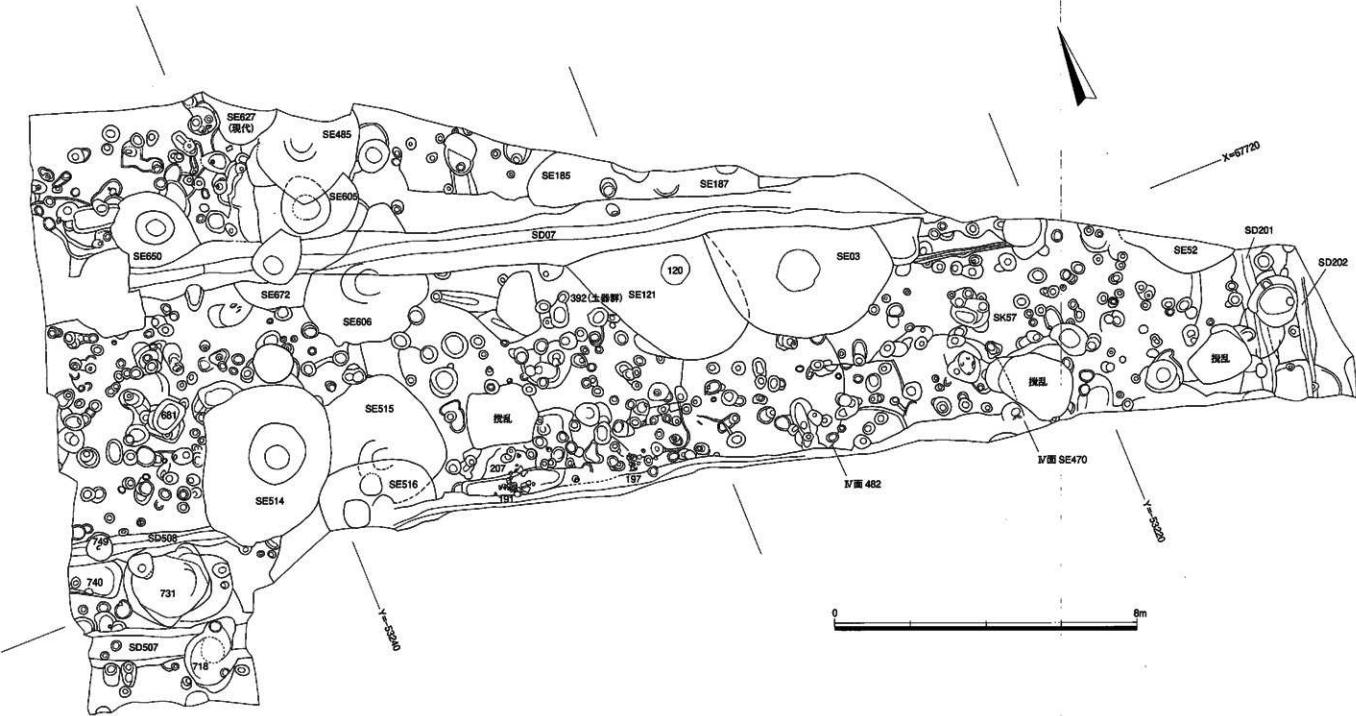


Fig.6 第III、IV面 遺構配置図(1/100)

溝から出土した遺物は9、19の備前摺鉢、12の火舎、17瓦質釜にみられるように15世紀後半以降16世紀前半くらいまで下限をおさえることができる。下層のV字状の溝からの出土遺物は少なく、概ね12世紀以降の遺物が出土しているが掘削された明確な時期は決められない。(出土遺物の個別説明はP-46の観察表に掲載)

#### SX09、131、132 (Fig.5, 7 Ph.8, 9)

SD07を切る青灰色のグライ化した砂を含む粘土からなる埋土の落ち込みを検出した。プランは梢円形が連続した形状を呈している。上部は直に近い壁面を明確に検出できたが、下底は土層の違いが漸移的となり形状が不整形となった。SD07の上部の群群が途絶えてきた位置にあることからも水流が搅拌した痕跡とも考えられる。この下部から後述のSE606をはじめとする井戸群が検出されたことから、その影響も考えられる。

#### 出土遺物

SD07を切ることから15世紀後半以降の時期が考えられるが、出土量が少なく明確な時期は決められない。図示した22は白磁碗のミニチュアである。

#### SD508

当初、調査区東半部の調査を行っている時点で、第Ⅱ面の黒色包含層が切れて落ち込んでいく状況がみられた。この時点で調査区南壁際に溝が走っていることが予想されたが、調査区際であったことと、他の遺構との切り合いで形状が不明確であった。このため、東半部では一連の溝であったが部分的に別名の溝の登録番号を付した。しかし、結果的には、東側からSX01、SD34、180、67、68、115、118、112、116の名称で登録された遺物をはじめとする資料はSD508と一連の溝もしくは含むものと判断できた。

調査区を西側に移して、SD508の形状は明確になった。SD508は南側に平行するSD507と同じく第Ⅱ面の遺構をのせる黒色包含層を切り S E 514も切る。従って、SD07同様に今調査で検出された遺構のなかでは比較的新しい時期が考えられる。走向方位もSD07に近いN-75°-Wをとる。

断面形は幅1.2m、深さ40cmの逆台形状を呈す。SD07と平行し、中心での距離は7.0mを測る。下底の深さは標高2.87mとなりSD07より25cm浅いレベルである。

#### 出土遺物

コンテナ1箱分の出土量である。図示した24の青磁は13~14世紀代と思われ下限はそれ以降となる。図示していないが、土師皿からも概ねこの時期と考えられる。

#### SD507

調査区西端で検出された。検出した範囲が延長約5mなので明確ではないが、SD508の方向よりやや東に振れ、SD508と中心間の距離を25mおき走行している。断面の形状は幅1.6m、深さ55cmの逆台形を呈し西側へわずかに深くなっていく。

#### 出土遺物

コンテナ1.5箱分の出土量である。図示した遺物の他に鎧蓮弁の龍泉窯系青磁、東播系捏鉢を含み下限は13世紀以降と考えられる。

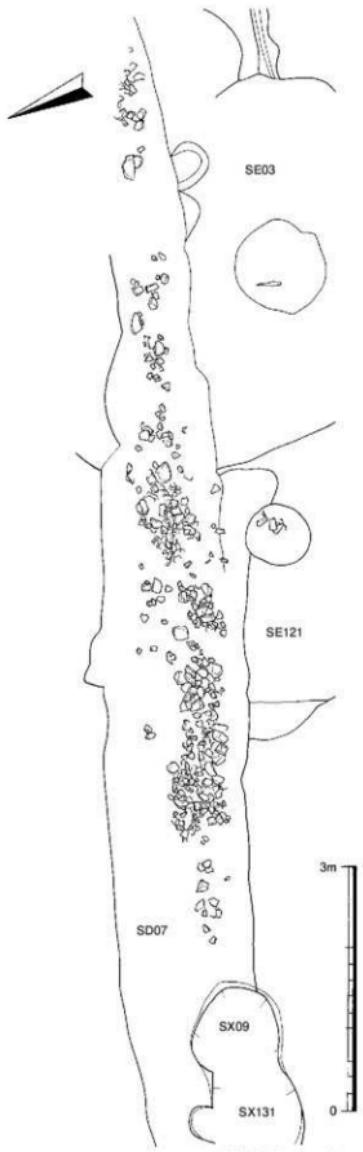


Fig.7 SD07上層溝縫群 (1/60)



Ph.6 SD07上層縫群検出（東から）



Ph.7 SD07 土層断面（西から）



Ph.8 SX09、131、132検出（西から）



Ph.9 SX09、131、132土層（南から）

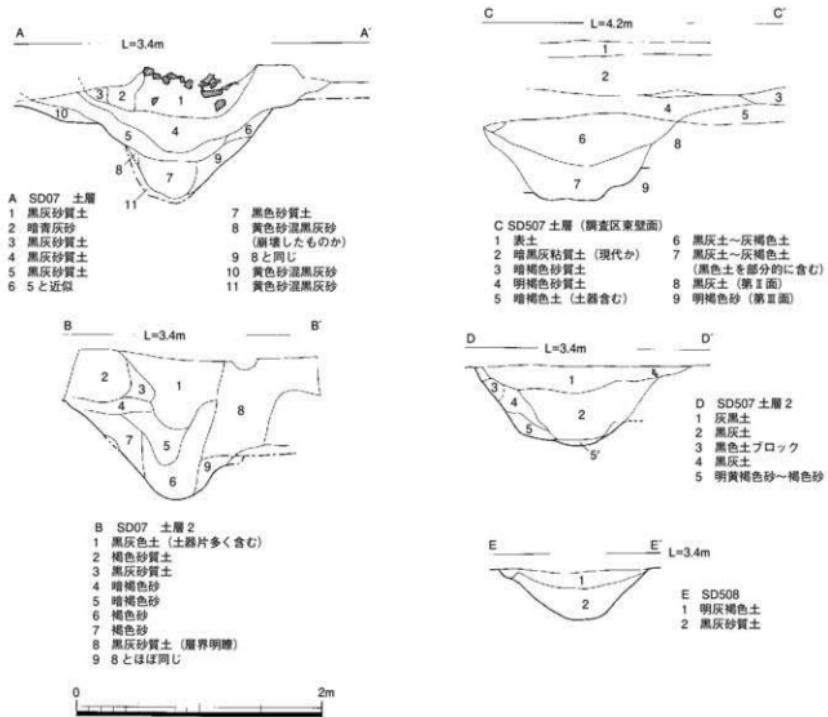
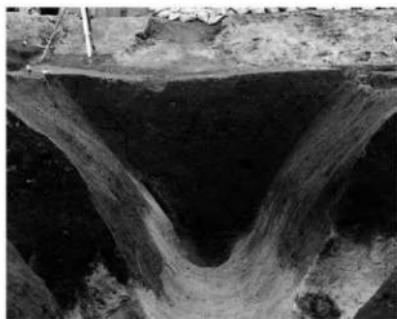
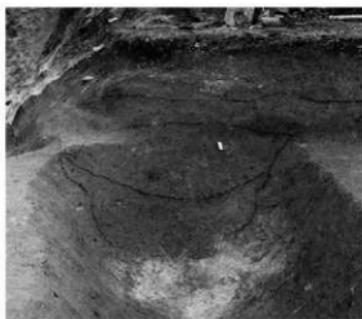


Fig.8 SD07、507、508土層 (1/40)



Ph.10 SD07下層断面 (西から)



Ph.11 SD507土層 (調査区東壁 西から)

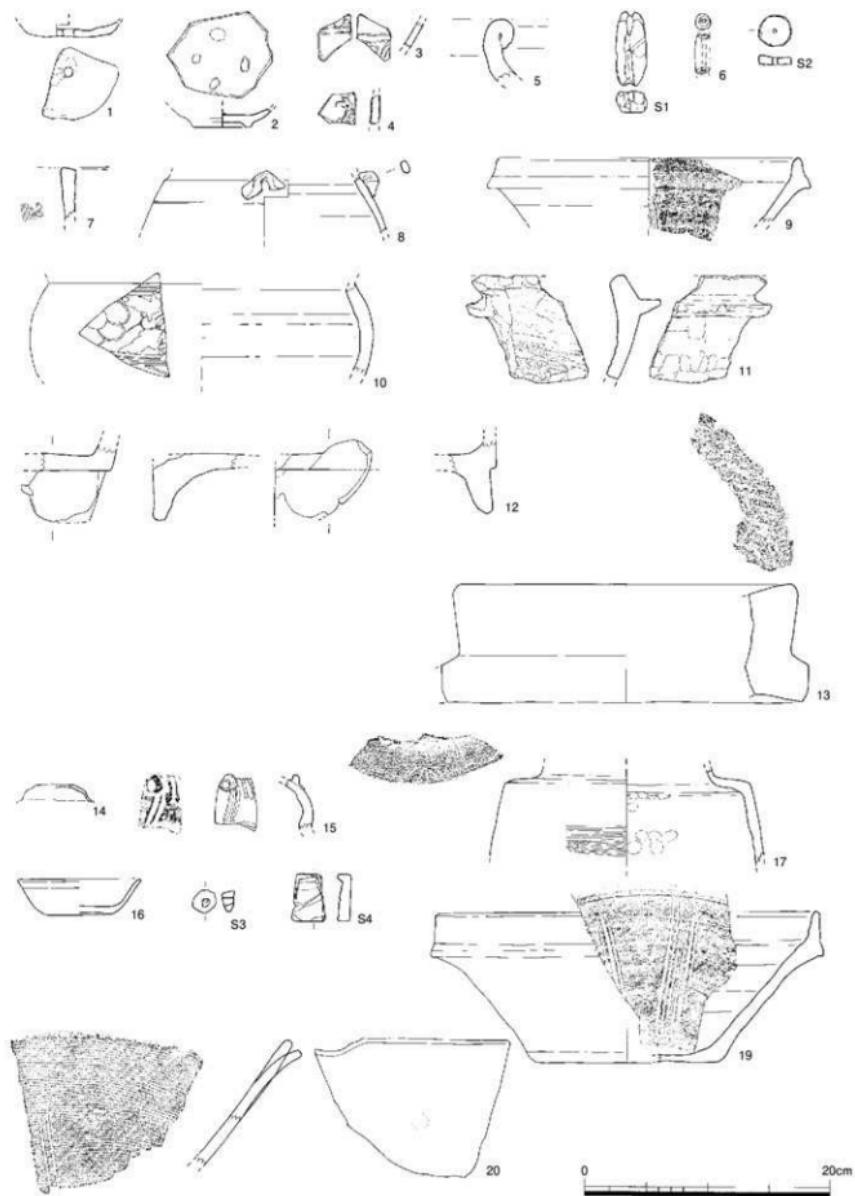


Fig.9 SD07上層溝出土遺物実測図 (1/4)

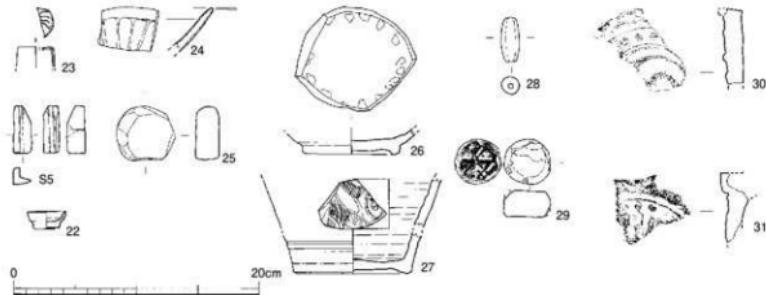


Fig.10 SD507、508出土遺物実測図 (1/4)

#### 井戸 (SE)

調査区内において、3箇所に集中して検出された。調査区西端近くで検出したSE650以外は第Ⅱ面の黒色包含層を切った埋土が明瞭に検出できた。

##### SE52

調査区東側の北壁際で検出された。Fig.4の土層図からも焼土塊を多く含むSX50や第Ⅱ面の黒色土を切ることが明確に判別できた。全面を掘れずに出土遺物は少なく下限の時期を押さえがたいが、土師皿や同安窯系青磁の出土から12世紀後半以降であることは確実である。

##### SE03

調査区中央の北壁際で検出された。西側のSE121を切るが北側はSD07から切られている。確認できる掘方は径4.5mを測り、第Ⅱ面の黒色包含層を明瞭に切る暗灰色砂の埋土からなる。

上面で径1.1mの井筒の痕跡を検出し、上面からの深さ2.2m、標高1.1mのレベルで径70cm、高さ約50cmの桶が出土した。

##### 出土遺物

出土遺物はコンテナ1.5箱分である。縄目や斜格子のタタキ文の瓦片を含む。下限は32の土師皿や36の口禿白磁碗から13世紀後半～14世紀代と考えられる。

##### SE121

SE03に切られ、約3×5mの楕円形プランの掘方を検出した。掘方の南縁はSE03と並び、平行して移設されたものと考えられる。上面で径80cmの井筒の痕跡を検出し、陶器壺44の破片が集まって出土した。下底からは上面からの深さ2.3m、標高1mで径75cmの桶の井筒が出土した。

##### 出土遺物

出土遺物は2箱弱である。瓦片、同安窯系青磁を含む。下限の明確な時期は押さえがたいがSE03と比較的近い時期と考えられる。

##### SE185、187

調査区北壁際で検出された為に規模や時期は明確にしがたい。SE185の上部出土の39は完形に近く12世紀前半代が考えられるが、構築された確実な下限は決めがたい。

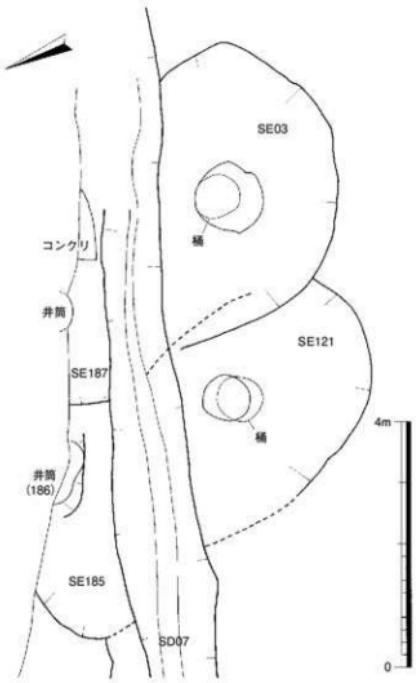


Fig.11 SE03, 121, 185, 187実測図 (1/80)



Ph.12 SE03井筒検出（北東から）



Ph.13 SE121井筒検出（北東から）



Ph.14 SD07, SE03,  
121検出、SE185土  
層（南西から）

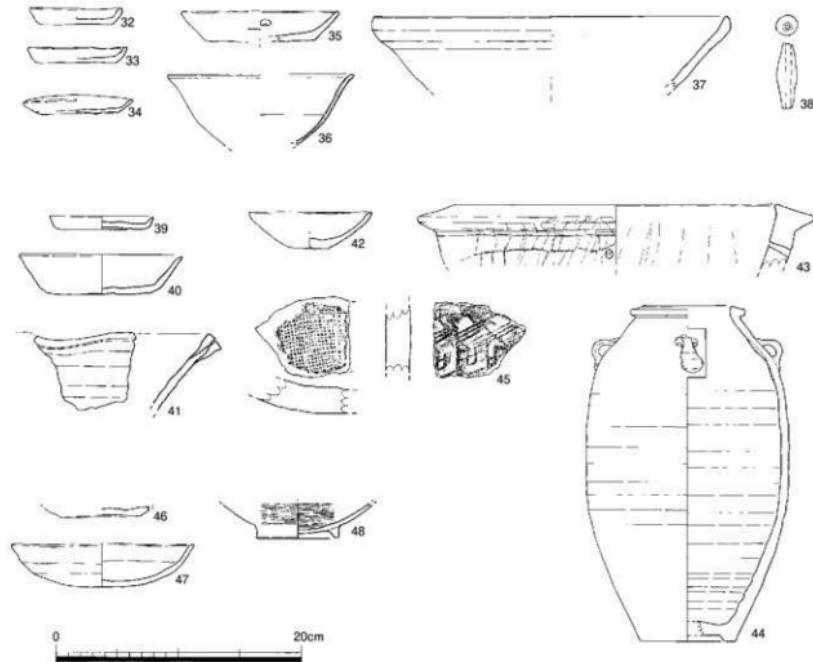


Fig.12 SE03、121、185出土遺物実測図 (1/4)

#### SE485、605、606、672

調査区の北西部で4基の井戸が集中し切り合って検出された。掘方は径2mの規模で比較的小形である。その形状は隣接したSE672、606が円形、SE605、485が方形に近い。検出時の切り合い関係は判断が難しかったがSE672→SE606→SE605→SE485と判断した。

井筒は総て桶が設置され、標高1.1mで桶板が検出され、約50cmの高さが遺存していた。

概要是以下の通り

遺構名	掘方の形状	掘方規模	深さ	下底の標高	井筒の種類	井筒径	別番号
SE672	円形	径2.4m	2.2m	0.5m	桶	50cm	605含む
SE606	略方形か	軸長3.6m	2.2m	0.4m	桶	70cm	153、373、374
SE605	方形か	軸長3.2m	2.3m	(1m)	桶	63cm	500
SE485	略方形	軸長2.7m	2.2m	(1.1m)	桶	60cm	154

\*別番号は調査中に同じ井戸の一部を異なった別の番号でとったものである。SE605についてはSE672のものが混在している。下底の標高の( )内は桶が検出されたレベル

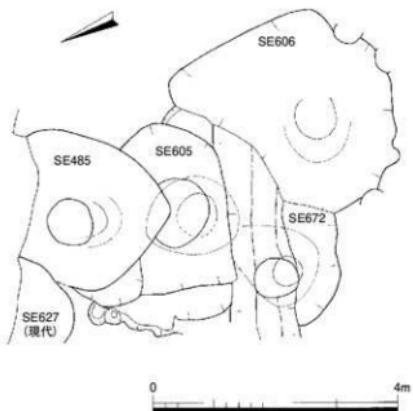


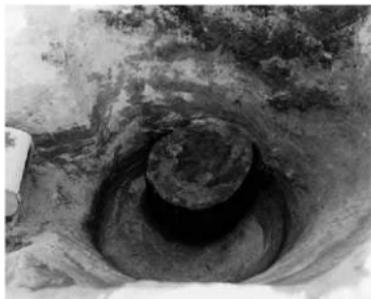
Fig.13 SE485、605、606、672実測図 (1/80)



Ph.15 SE485、606、607、472検出 (北東から)



Ph.16 SE485、606、607、472井筒 (北から)



Ph.17 SE606井筒

#### 出土遺物

SE485出土遺物は12世紀代以前のものも含むが、下限は49、上部から出土した67の土師皿や54の青磁碗から13世紀後半以降と考えられる。SE605、606、672もSE485と近い時期と考えられるが詳細は不明確である。

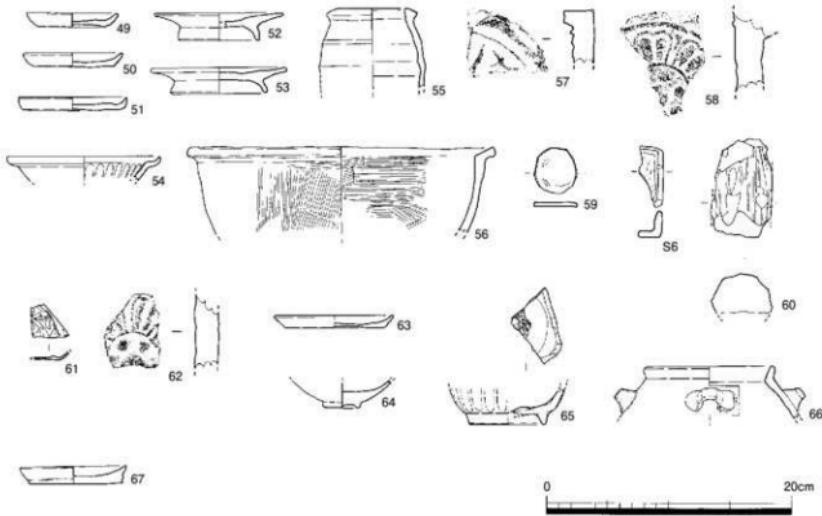


Fig.14 SE485、605、606、672出土遺物実測図 (1/4)



Ph.18 SE514、515、516検出 (南から)

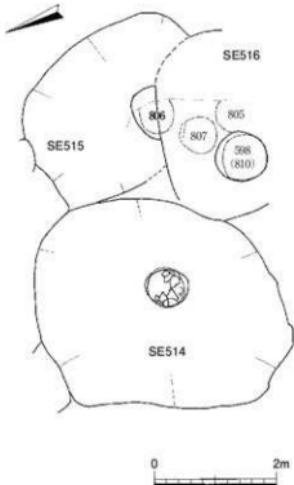


Fig.15 SE514、515、516実測図 (1/80)

#### SE514

調査区の南西部で検出した。SE596、SE516と切り合っているが、切り合い関係からSE516→SE515→SE514と考えられ最も新しい時期の設置である。掘方のプランは梢円形ないし隅円方形に近く、西側のラインは直線的である。上面で1.7×1.3mの長方形の掘方を検出しSK502とした。SK502の下底は不明確で、その位置の下底から井筒が検出されたことから井側の木枠の痕跡であった可能性がある。下底には上端からの深さ2.3m、標高1.06mで径64cmの桶が高さ約60cm遺存していた。なお、標高0.2mで出水する。

#### 出土遺物

73の縁軸陶器をはじめ図示したほとんどの遺物が12世紀以前と考えられるが、70の口禿やSE516との切り合い関係から13世紀後半以降、14世紀代に入るものと思われる。

#### SE515、516

SE514と切り合い、調査中に判断された関係は上述の通りである。SE515の掘方は長方形に近く、西側に寄った位置に井筒806が設置されていた。

SE516の下部からは3基の井筒が接するように検出され、各井筒に遺構番号付し登録した。その中で上部で検出した井筒598内には土師皿が集中して出土した。他の2基の井筒は下底近くで検出した。SE514を含め比較すると以下の通りである。

遺構名	掘方の形状	掘方規模	深さ	下底の標高	井筒の種類	井筒径	井戸、井筒番号
SE514	梢円形	3.4×4m	2.3m	0.5m	桶	64cm	
SE515	長方形	2.5×3.4m	2.9m	0.46m	桶	54cm	334、596、(806)
SE516	不明	3×?m	2.9m	0.45m	桶	62cm (807) 66cm (598)	315、(518、598、810)、 (805)、(807)

井戸、井筒番号の（）内は井筒番号。同じ（）内の番号は同一井筒

出土遺物

SE515からは80の花卉文の瓦をはじめ12世紀代の比較的古い遺物が出土しているが、下限は明確ではない。

SE516からは井筒(598)から多くの土師皿や壺が出土した。土師皿の81~83は同じ法量で口径7.5cm前後を測る。85~87の壺も口径12.50cm前後の同じ法量である。84、88は井筒の下部から出土し、他と異なる。これらの土師器の底部には87を除き板目はみられない。これらの法量や形状から14世紀前後の時期と思われる。



Ph.19 SE516、515内井筒（南）



Ph.20 SE516内井筒（805、806、807、  
西から）



Ph.21 SE516内井筒（598）内土器器出土状況



Ph.22 SE514内井筒（西から）



Fig.16 SE514、515、516出土遺物実測図 (1/4)

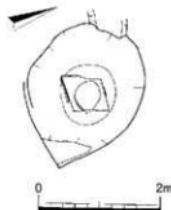


Fig.17 SE650実測図 (1/80)

#### SE650

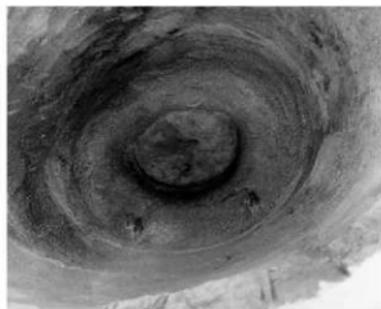
調査区の北西隅近くで検出された。単独で検出され、掘方の規模も小さく他と異なる。掘方は第Ⅱ面では検出できず、褐色砂の第Ⅲ面で径2mの円形プランを検出できた。第Ⅲ面からの深さ80cm（標高2.05m）で土圧で変形したと思われる菱形の木枠を検出し、さらにその下部から40×50cmの楕円形になった曲物の井筒が出土した。曲物の出土レベルは標高0.9mで高さ約20cmが遺存していた。遺物はコンテナ1箱分が出土した。図示していないが、10世紀前半から12世紀前半までの土師器、白磁片、片口搾鉢片、瓦等の遺物を含む。瓦片に斜格子の叩きを有す。



Ph.23 SE650内  
方形井戸枠



Ph.24 SE650検出 (西から)



Ph.25 SE650内井筒 (曲物、南から)

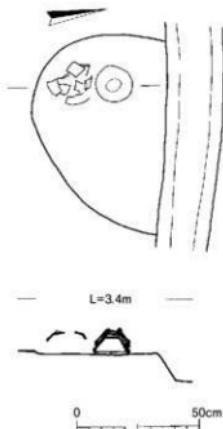


Fig.18 SX71実測図 (1/20)



Ph.26 SX71検出 (南東から)



Ph.27 SX71白磁碗出土状況

(小規模土壤)

#### SX71

既述の通り、バックホーで黒色包含層（整地土か）を掘り下げている作業中に白磁碗に当たり一部破壊した。白磁碗は3個体の完形品を伏せた状態で2セット並列し計6個体が出土した。掘方は不明瞭で下層の褐色砂質土に変わって、黒色土の広がりが不整形に見えた程度である。白磁碗は掘方の縁辺近くに置かれ、底面は最下の白磁碗の口縁部端と同レベルである。南側は暗渠に切られている。墓の可能性があるが不確実である。

#### 出土遺物

上述の通り重ねられた92~97の白磁碗は完形品である。同型式で大宰府分類のIV類に該当する。

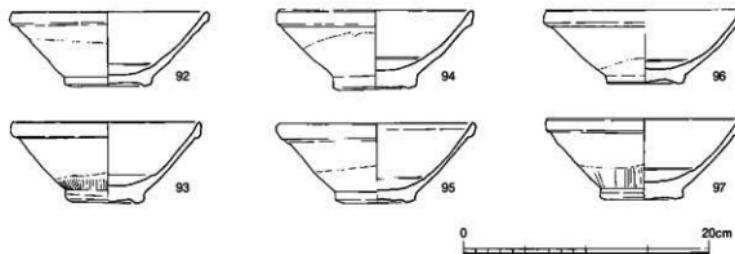


Fig.19 SX71出土遺物実測図 (1/4)



SX71出土白磁碗

### SK15

調査区の東端で検出された。径110～130cmの円形プランを呈す。埋土はグライ化した暗青灰色粘土で第Ⅱ面の黒色土検出面からも明確に識別できた。当初、井筒の可能性を考えていたが深さ0.8mでおさまる。

出土遺物 (Fig.21)

上面近くから土師器坏の完形99を含む土器片が出土した。出土遺物からの時期は13世紀前半位までと思われる。

### SK63

調査区南東部に位置する。第Ⅱ面では65×90cmの長方形プランを検出した。深さは約50cmを測り、柱穴との切り合いがみられた。

### SK57 (SK376と同 Ph.38)

調査区東側中央部で検出された。SK63と近接し、大きさも同程度である。長軸長約1mで最深部で第Ⅲ面から40cmを測る。柱穴と切り合う。

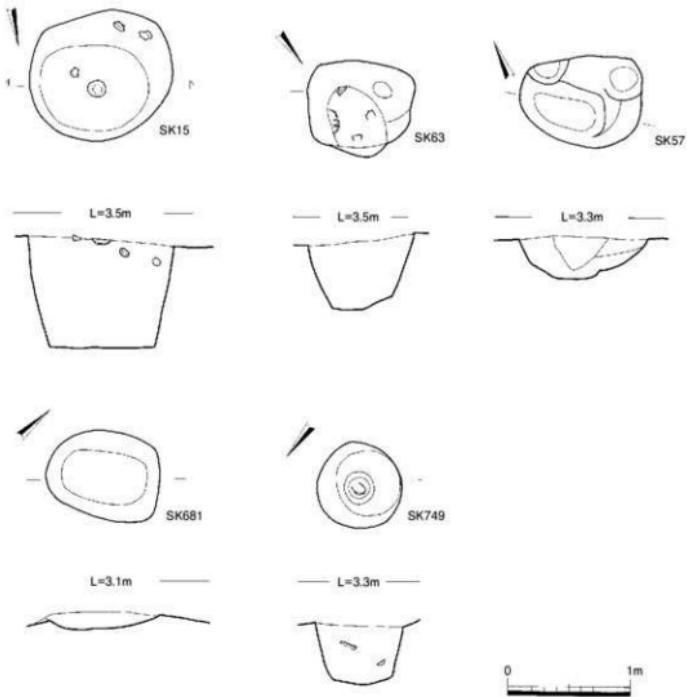


Fig.20 土壌実測図 (SK15、63、376、681、749、1/40)

#### SK681

調査区西際で検出された。第Ⅲ面で70×95cmの略方形プランを検出したが、地山の第Ⅳ面で下部に造構が切り合っている事が確認された。深さは約15cm程度である。

#### SK749

調査区西際で検出された。後述のSK746と切り合っている。径70cmの円形プランを呈し、井筒の可能性があったが、深さは46cmにとどまり、中心がわずかに深くなる。

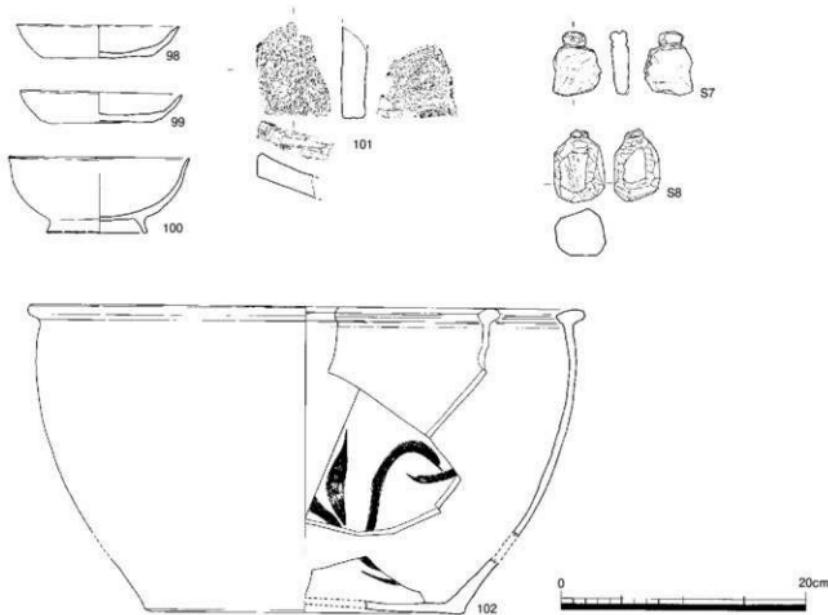
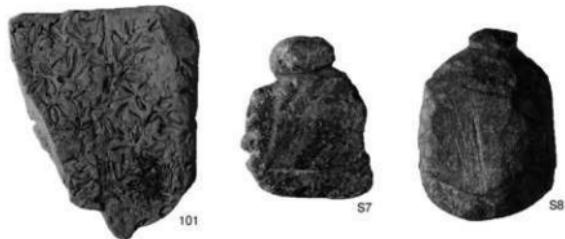


Fig21 SK15出土遺物実測図 (1/4)



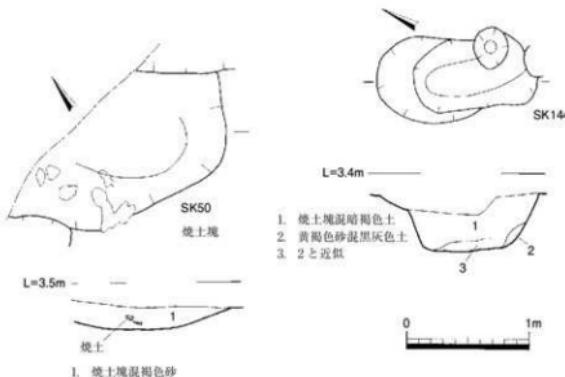


Fig.22 SK50, 144実測図 (1/40)



Ph.28 SK50土層ベルト（焼土塊検出）



Ph.29 SK144土層ベルト（焼土塊検出）

（焼土を埋土に多く含む土壤）

第Ⅱ面の黒色土中には部分的に焼土が分布する範囲がみられた。特に中央部の南側では広範囲に塊状になったものを含め散布していた。(Ph.44)

#### SK50

調査区の東端の北壁際でSE52に切られて検出された。径約140cmの略円形プランで浅皿状の断面形を呈す。焼土塊を多く含む埋土で周囲にも焼土や焼土塊が散布する。

#### SK144

調査区中央の南寄りで検出された。焼土塊を多く含む埋土からなる。検出面で長径134cm、短径70cmの隅丸長方形のプランを呈していたが、下底に向かって窄まる。深さ40cm。

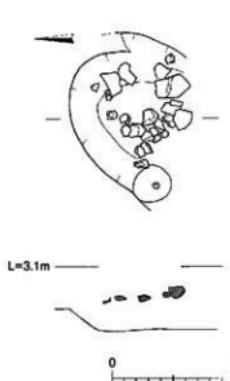


Fig.23 SK191実測図 (1/40)



Fig.24 SK191出土遺物実測図 (1/4)



Ph.30 SK191検出 (北東から)

(集石土壙)

#### SK191 (SX103)

調査区中央の南壁際で検出した。上部は径約1mの略円形プランのSX103で登録していたが、下部で焼けた割石の集石を検出しSK191とした。深さは約40cmを測る。

図示した遺物は2点であるが11世紀中葉前後の時期が考えられる。軒丸瓦191は大宰府分類の132に該当し、大宰府のほか鴨臘館からも出土している。

(土壤 Fig.25 )

#### SK519 (Ph.31)

調査区の北西隅近くで検出された。第Ⅱ面で検出され、90×160cmの略長方形プランを呈す。深さは約10cmを測る。

#### SK740 (SK746 Ph.41)

調査区西壁際で検出された。SK749に切られている。隅丸の長方形プランを呈し幅100cmを測るが、長軸長は不明である。深さ18cmを測り、灰白色砂質土の单一の土層である。

#### SK501

調査区北西隅近くで検出された。第Ⅱ面で西辺が広がった重な台形状のプランが検出された。長軸長126cm、西辺116cm、東辺94cmを測る。

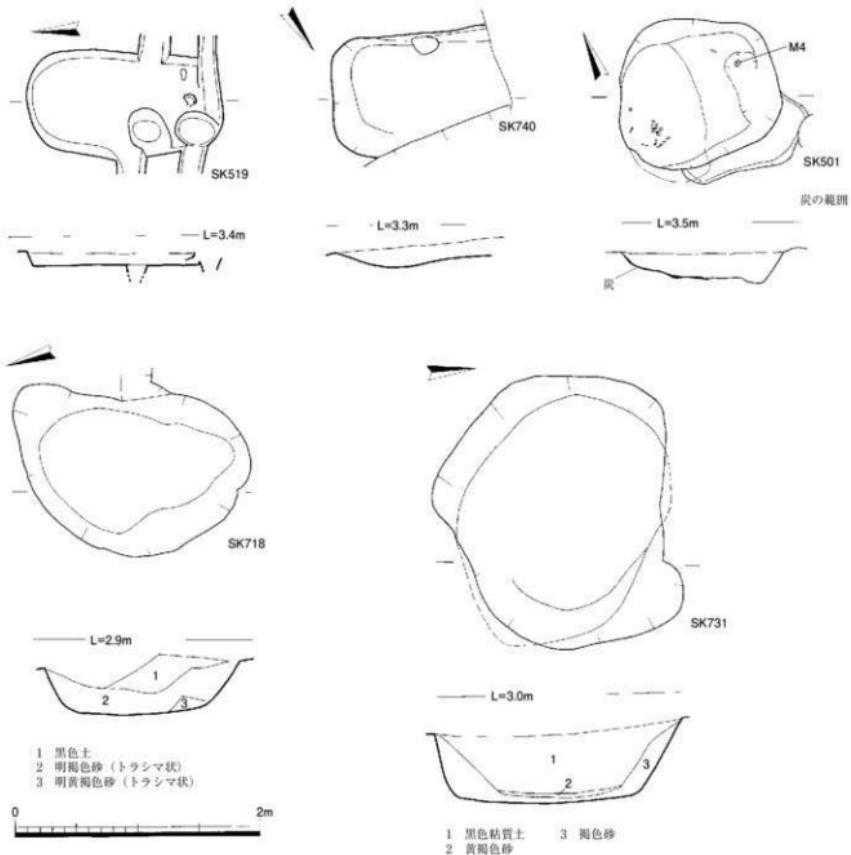


Fig.25 土壤実測図 (SK519, 740, 501, 718, 731 1/40)



Ph.31 SK519検出



Ph.32 SK501土層（灰、炭層検出）



Ph.33 SK718、731完掘状況（南から）



Ph.34 SK718土層（西から）



Ph.35 SK731土層（東から）



Ph.36 SK501土層



Ph.37 SK501内出土切羽



Ph.38 SK58検出（南から）



Ph.39 SK681検出（南から）



Ph.40 SK681完掘



Ph.41 SK746土層ベルト（北西から）



Ph.42 SX392土師器出土状況（南から）



Ph.43 SP791遺物出土状況

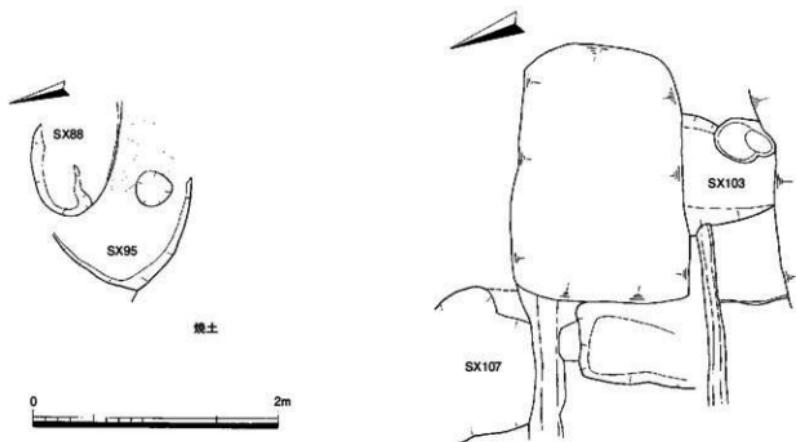


Fig.26 第II面検出SX95 (SX197上部)、SX103 (SX191上部) 実測図 (1/40)



Ph.44 SK144周辺焼土分布状況（南から）



Fig.27 第Ⅱ～Ⅳ面土壤出土遺物実測図1 (1/4)

西側の下底から灰と炭が重層して検出され、炭に混じって焼けた粘土塊が出土した。下底は東側へ下がり、東壁際の一段下がった位置から銅製の切羽M4が出土した。この切羽は出土位置から別造構に伴う可能性がある。出土遺物は115の白磁椀、116の緑釉陶器、S9の砂岩製石球を含み、12世紀後半以降の時期が考えられる。

#### SK718

第Ⅲ面の調査区南西際で検出された。SD507に切られている。長軸長200cm、短軸長144cmの歪な楕円形プランを呈す。深さ50cmを測り、南側に一段高いテラスを有す。

#### SK731

SK718と近接し、同じ第Ⅲ面から検出された。長軸長240cm、短軸長200cmの楕円形プランを呈す。

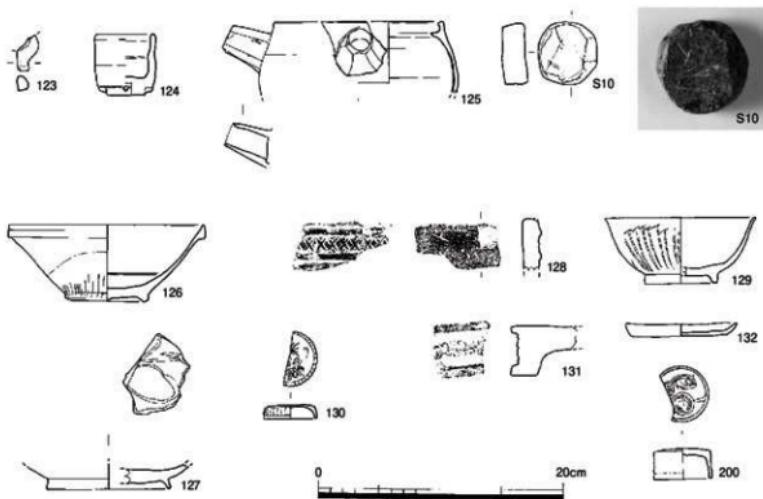


Fig.28 第II～IV面土壙出土遺物実測図2 (1/4)

深さは60cmを測り、埋土上層はレンズ状に黒色土が堆積し、下底近くは地山に近い黄褐色砂が堆積していた。位置や埋土の近似からSK718と関連があるものと考えられる。

図示した土師器皿122は11世紀初頭前後（山本編年XⅠ期）と考えられる。

#### SK502

SE514の中心に略長方形プランの掘り込みを検出した。上層は灰色～黄灰色のシルトと砂の互層で立ち上がりを明確に識別できるが、下層では不明瞭となり、下底は不確かであるが深さは40cmを測る。さらに下部には井筒の跡が検出できた為に井戸枠等の施設とも考えられる。出土遺物には117の軒平瓦や118のガラス培塿が含まれる。

#### SK681 (Ph.39, 40)

第II面の調査区西際で検出された。略方形プランを呈し、長軸長93cm、短軸長73cmを測る。深さは約15cm。

#### SX392 (Ph.42)

第II面の調査区の中央部で検出した。一部SE121に切られている。落ち込みのプランは検出できなかったが、わずかな疊に混じって土師器皿と坏が集中して出土した。底面から浮いた状況で出土し、廃棄されたものと思われる。出土した土師器皿は完形もしくは完形に近いものが15個体。坏は4個体を数える。

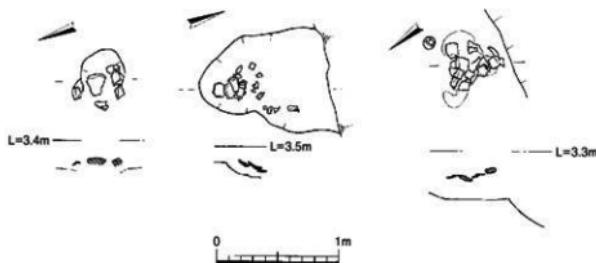


Fig.29 SK64、135、147実測図 (1/40)



Ph.45 碣板64検出



Ph.46 SX135遺物出土状況（東から）



Ph.47 SX197検出（北東から）

出土遺物 (Fig.27 109~113)

土師皿は口径9.5cm前後に集中し、1点口径10.3cmのものを含む。体部は中位で屈曲し、底部はヘラ切りでわずかに丸みをもつ。板目は付くものが多いが無いものもある。内底部はヨコナデの起伏のある痕跡が残る。环は口径14.8cm前後、器高3.4cm前後。口縁部近くで外反する。体部と底部の境に押出しによる指頭圧痕と内面に斜位のコテ当てが残る。時期は12世紀前半までの下限が考えられる。なお、土師皿111の1点のみは糸切り底であるが、混入の可能性がある。

#### SX791

調査区西側の柱穴上部の黒色土（第2面）から出土した。黒色土器121の完形品の中に土師器碗120が正置に重ねられた状態で出土した。11世紀初頭前後の時期と考えられる。

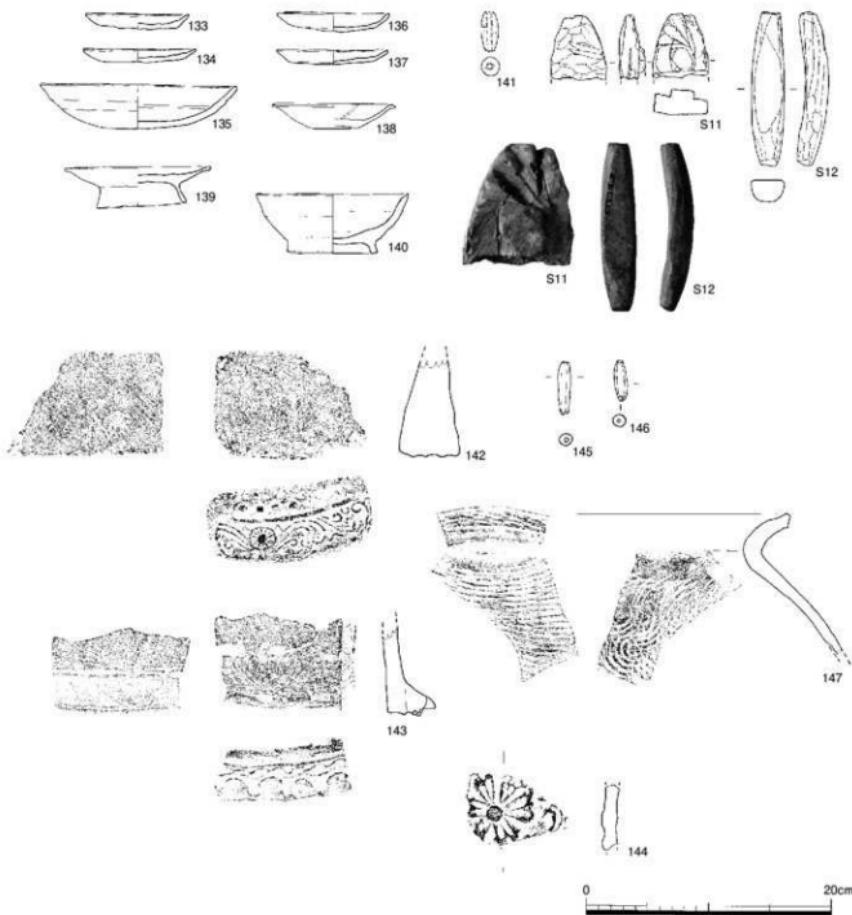


Fig.30 柱穴出土遺物実測図（1/4）

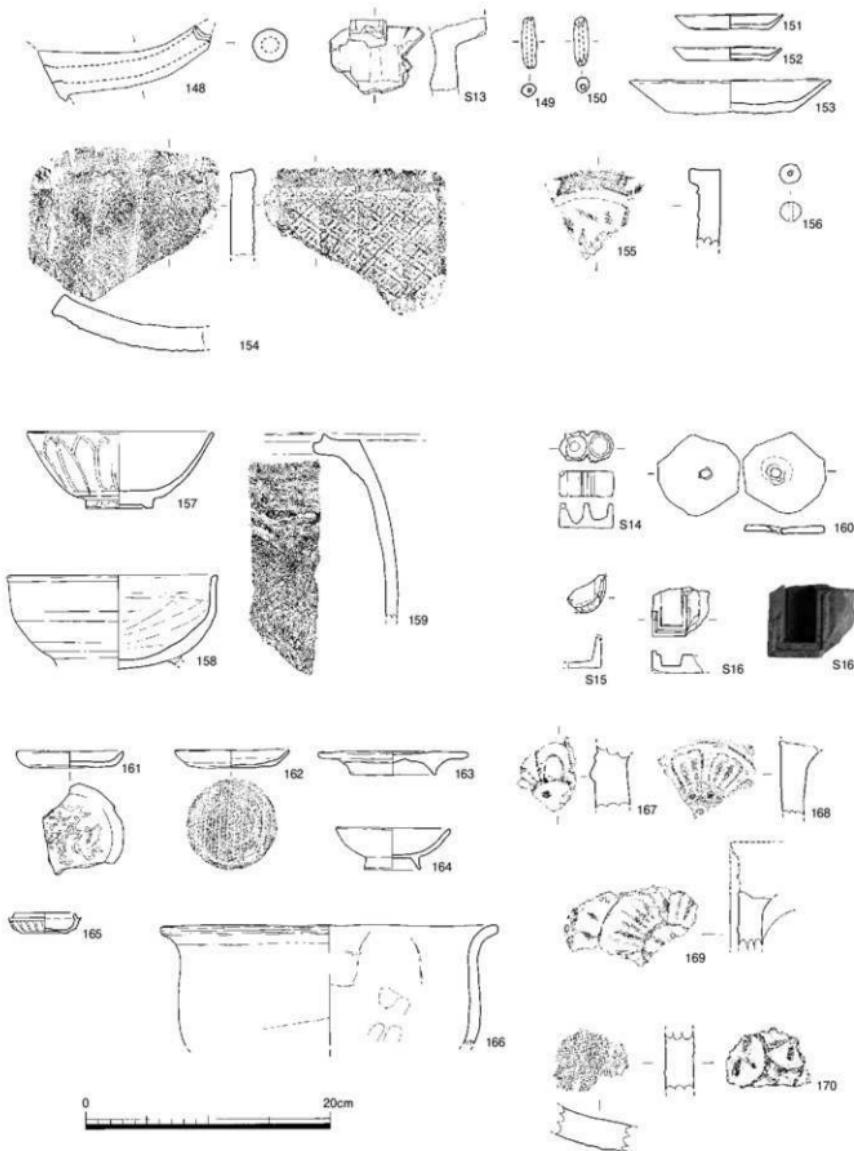


Fig.31 第Ⅱ面黒色包含層出土遺物実測図 (1/4)

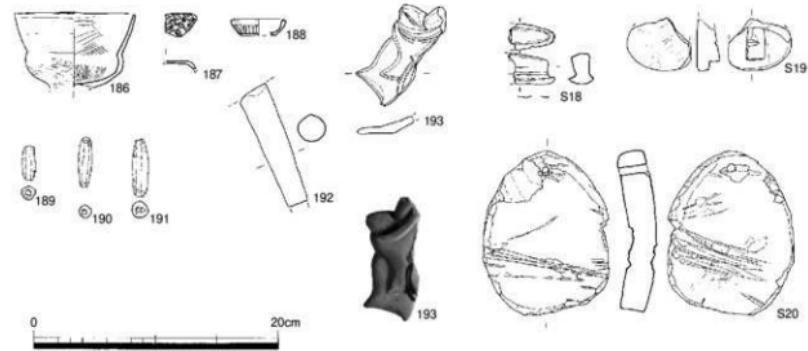
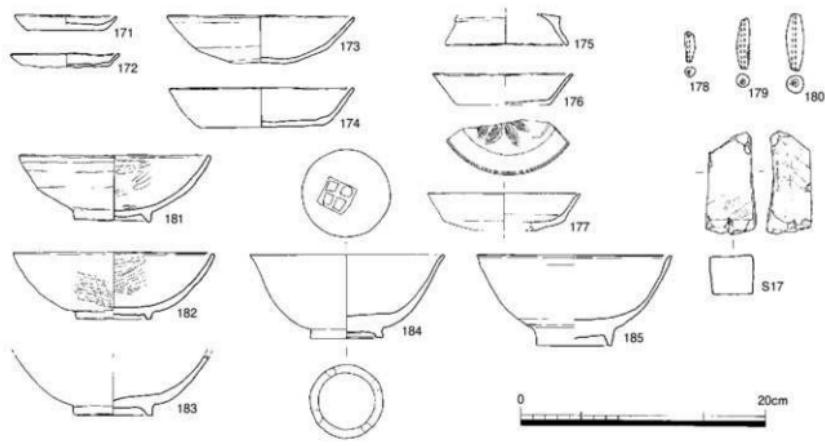
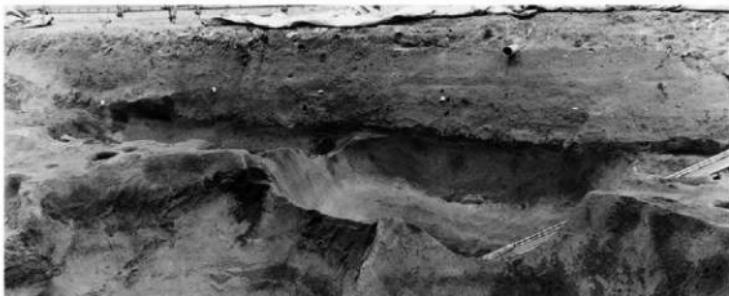


Fig.32 第I面、第II面～IV面検出、攪乱出土遺物実測図（1/4）



Ph.48 SX470、482土層（調査区南壁 北から）



Ph.49 SD202検出（南西から）

#### SX95、98

第II面の調査区中央南側では焼土、炭の分布がみられた。SX95、98の不整形の落ち込みにも焼土や炭が検出された。

#### SX103、107

第II面の調査区中央南側で検出された。SX103は下部の第III面で検出されたSX191の上部である。SX107から126の白磁碗や127の越州窯系青磁碗が出土した。

#### SX64 (Ph.45)

第II面の調査区中央南側で検出された。平坦な礎板状の石材を中心に石鍋片や瓦片、土師器片が圓むように出土した。

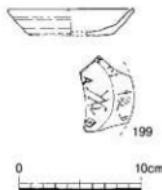


Fig.33 SD202出土墨書き器  
実測図 (1/4)



### SX135 (Ph.46)

第II面の調査区北東部で検出された。楕円形の土壤に破碎した土師器坏、皿が集中して出土した。

### SX197

第II面の調査区北西部で検出された。中央の平石を囲むように須恵器片が重なり合っていた。礎板としての利用が考えられる。

### 第IV面検出遺構

地山の砂丘面の第IV面で検出された遺構を以下に挙げる。

### SX470、482 (Ph.48)

調査区の中央部で第2面の黒色土を除去すると地山がやや黒色を帯びた汚れるある土を検出し、井戸の可能性を考え、SE470、482とした。しかし、浅く均質な埋土で井戸と考えがたい為SXとする。調査区際に位置し全体の形状を露呈することはできなかったが、概ねSX470は径5m以上、SX482は径4.4m、深さは発掘途中で不明確となったが、1m前後と思われる。第2面の黒色土より下層であることは確実であるので比較的古い時期が考えられる。なお、本調査から出土した遺物の中で最も古い時期は186の古墳初頭のものがあるが、この時期の明確な遺構は検出されていない。上面から出土した114の土師皿は掘削時期は示していない。下部からはほとんど遺物は出土しなかった。

### SD201、202 (Ph.49)

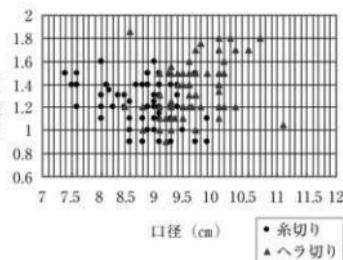
調査区東端で地山面まで下げて検出した。南北溝で平行してN-12°-Eの向きを走行し現代の町並とほぼ合致している。SD201は幅54cm、深さ37cm、SD202は幅40cm、深さ20cmを測る。SD201と202の間は検出面で約80cm空いている。

199は墨書き器である。土師器坏に「老」「後？」が書かれている。祭祀に伴うものか。

### (出土土師器)

Tab.3は54次調査で出土した140点の土師器（約1/2以上遺存するもの）を集計した表である。口径9.0cm前後に集中し、12世紀中頃にピークがある時期と考えられる。下の図示した土師器は法量（口径11.1cm、器高1.05cm）が他と異なり灰白色を呈した搬入品である。

Tab.3 出土土師器のデータ



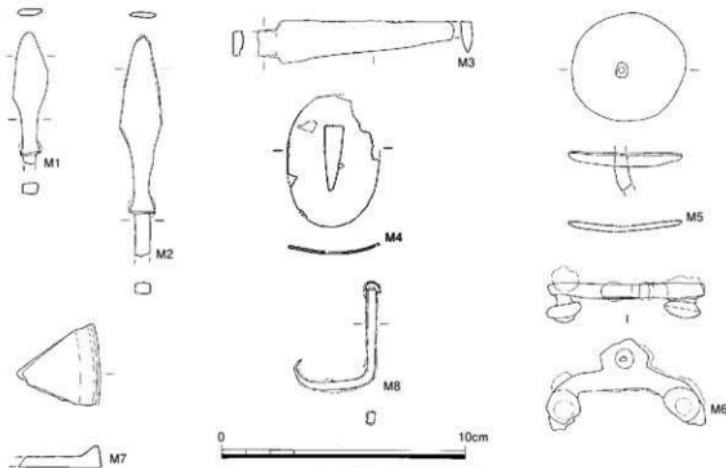
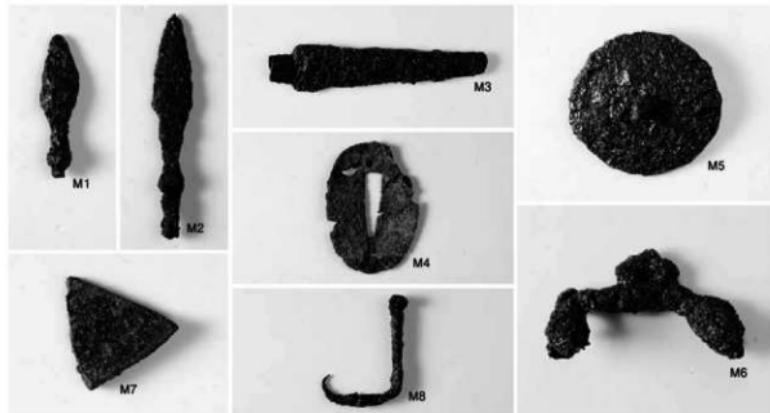


Fig.34 出土鉄器実測図 (1/2)



#### 出土鉄器

掲載した鉄器の他、釘7本等が調査によって出土した。時期は他の出土遺物同様に古代末から中世の範囲（10世紀末～15世紀代）に含まれると思われる。M1、M2鉄簇のかつぎは鐵身に近い位置にある。M6鉄鍋等の吊り金具である。個別説明は、P-49の遺物観察表を参照されたい。

#### 銅錢

判読可能なものが14枚出土した。11世紀代の初鑄の銅錢に集中している。

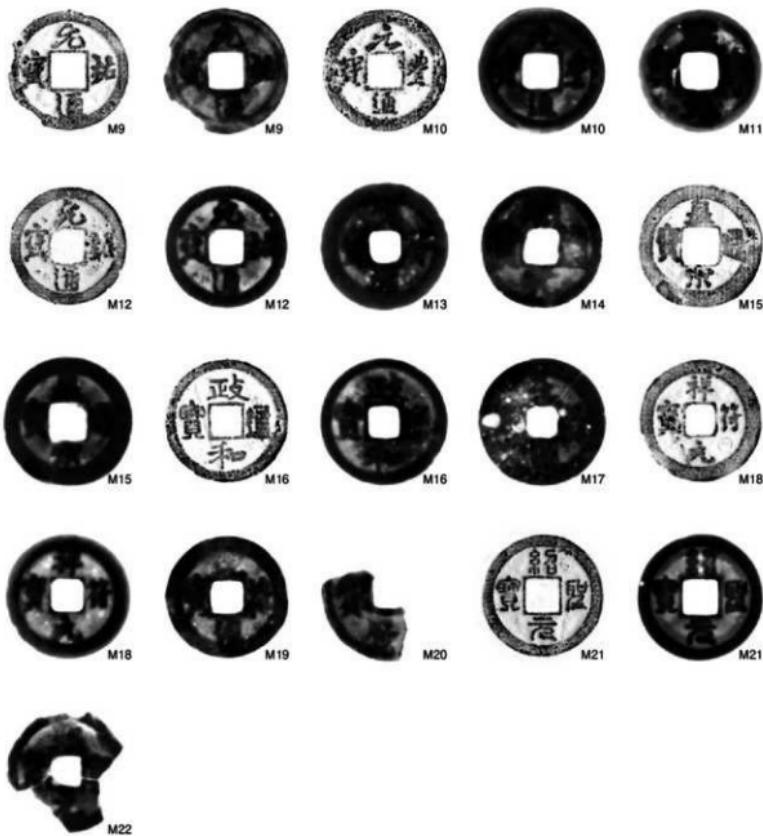


Fig.35 出土銅錢拓影とX線撮影写真

番号	出土地点	資料名	初鑄年	番号	出土地点	資料名	初鑄年
M9	I面掘り下げ	元祐通寶・行書	1086	M16	SD508検出	政和通寶・分楷	1111
M10	I面掘り下げ	元祐通寶・行書	1078	M17	SX135	元符通寶・行書	1098
M11	I面掘り下げ	熙寧元寶・真書	1068	M18	SK22	祥符元寶	1009
M12	I面掘り下げ	元祐通寶・行書	1086	M19	598(井筒)	元?符通寶・行書	1098
M13	I面掘り下げ	祥符通寶	1009	M20	SP548	××□寶	
M14	II面掘り下げ	開元通寶	845	M21	SE03掘方内	紹聖元寶・篆書	1094
M15	II面検出	皇宋通寶・真書	1038	M22	SX135	紹聖?元寶・行書	1094



出土瓦当写真

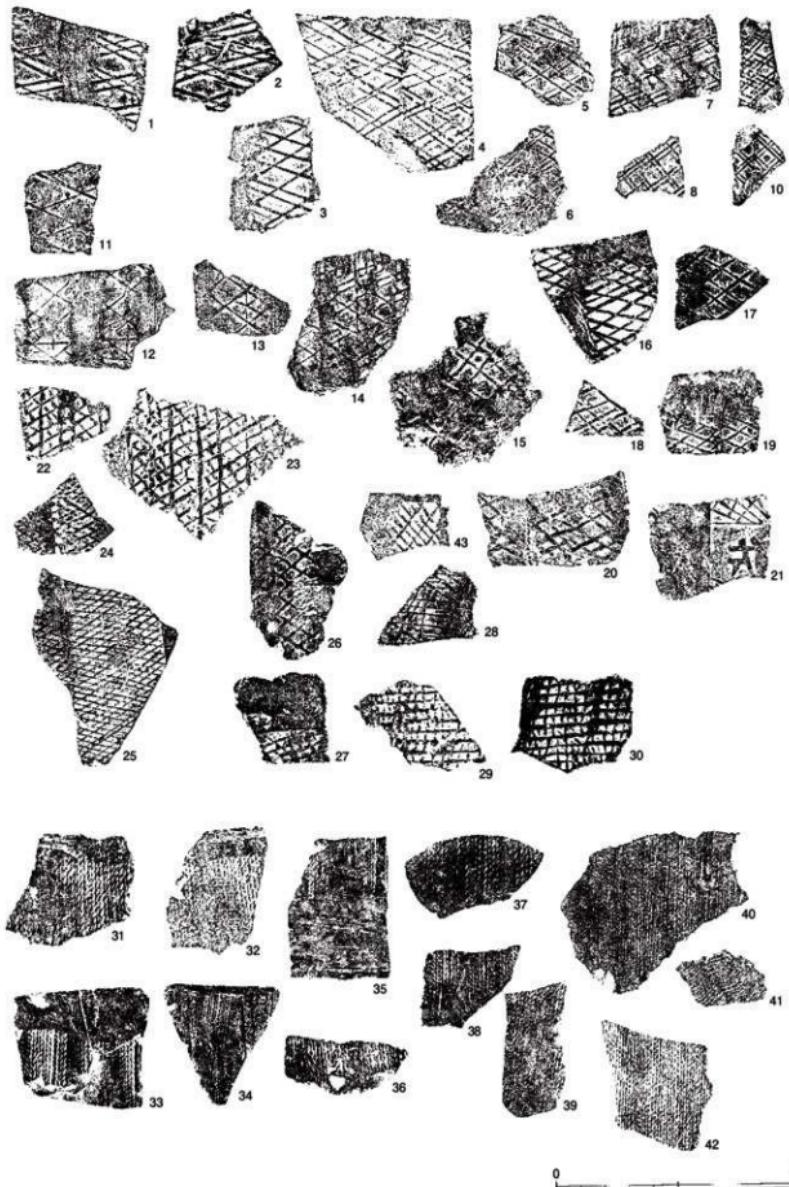


Fig.36 出土瓦タタキ拓影 (1/4)

番号	種類	道標番号	詳細	遺物種類	器形	説明
1	SD	7	上部	土師器	环片	环片に径8mmの穿孔を有す。
2	SD	7	螺旋	青磁	碗	朝鮮青磁。内面込み、外面覺付に砂目跡が残る。内面の釉が火熱により溶解。
3	SD	7	下部	青磁	碗	朝鮮象嵌青磁。(粉青沙器)
4	SD	7	下部	青磁	皿	龍泉窯系青磁。内面に魚文貼り付け。
5	SD	7	ベルト 上層	陶器	甕	備前焼。
6	SD	7	下部	土製品	土鍊	上下端部を欠損する。
7	SD	7	螺旋	土師質	火舍	スタンプ文を有す。
8	SD	7	ベルト 上層(疊含む)	陶器?	耳壺	遺存部は無釉。
9	SD	7	螺旋	陶器	擂鉢	備前焼。
10	SD	7	螺旋	白磁	壺	磁州窯系。草花文鉢絵
11	SD	7	上部	石器	石鍋	滑石製石鍋片。
12	SD	7	螺旋	土師器	火鉢の脚部	方形容体に半円状の脚部が付く。内外面に炭が付着。
13	SD	7 (6)	螺旋下部	砂岩	臼	砂岩製挽き臼片
14	SD	7	161	陶器	蓋	外反する口縁端部が欠損。内面のみ褐色の施釉。
15	SD	7	161	白磁	壺	平行した条線と貼り付け文を有す。
16	SD	7	(512) 上部(ベルト)	白磁	皿	口壳口縁。外底部以外は施釉。
17	SD	7	(512) 上層	瓦質	釜	内外面黒色。外面部に煤が付着。外面部肩部に櫛歯による6本の放射線状の施文。
19	SD	7	(512) 上層	陶器	擂鉢	備前焼。
20	SD	7	(512) 上層	土師質	擂鉢	内面に横位のハケメを明瞭に残し、擦目を有す。
21	SD	7	(512) 上層	瓦?		輪7.6cm、厚さ3.9cm
22	SX	131		白磁	碗ミニチュア	口径3.2、器高1.5cm
23	SD	508		青白磁	合子	天井部に花弁状の弧線と周縁に列点文の形起
24	SD	508		青磁	碗	内面に渦巻きと平行的にヘラ模様。
25	SD	115	下部	丸	丸玉	周縁を径4cmの略円形に直線的にそぎとる。
26	SD	507	上層	青磁	碗	越州窯系青磁。
27	SD	507	上層	青白磁	甕	ヘラと彫刻による施文。外底部は釉を拭き取る。
28	SD	507	上層	土製品	土鍊	最大径1.5cm、長さ3.7cm
29	SD	507	(拡張)	瓦	瓦玉	2重繩の斜め文瓦の瓦玉
30	SD	507	上層	瓦	軒丸瓦	巴文。
31	SD	507	上層	瓦	軒丸瓦	花卉文の瓦当が背面で剥離。
32	SE	3 内井筒		土師器	小皿	口径7.6cm、器高1.4cm。回転糸切り底。
33	SE	3 内井筒		土師器	小皿	口径8.2cm、器高1.4cm。回転糸切り底。
34	SE	3 捣方下部		土師器	小皿	口径8.9cm、器高1.6cm。火熱を受け変色し歪む。回転糸切り底。
35	SE	3 捣方		土師器	坏	体部に穿孔を有す。
36	SE	3 捣方下部		白磁	碗	口壳口縁。
37	SE	3 捣方下部		陶器	すり鉢 東播系程鉢	
38	SE	3 檜出		土製品	土鍊	長5.4cm、最大径1.6cm。
39	SE	121		土師器	小皿	口径8.5cm、器高1.1cm。底部は上げ底で回転糸切り。
40	SE	120	井筒	土師器	坏	口径13.4cm、底部糸切り、平行木目状の压痕を有す。内面に煤付着。
41	SE	121		須恵質	捏鉢	東播系か? 口縁端部がわざかに張り出す。
42	SE	121		陶器	鉢	外面部は火熱を受けているが黒灰色、内面褐色に発色。
43	SE	121		石器	石鍋	滑石製。滑石有り。
44	SE	121 (190)	井筒	陶器	四耳壺	回転陶器。全面に施釉。口縁端部上面と高台に粘土の目跡。
45	SE	121		瓦	平瓦の破片	凸面に斜格子文を、3重線、U字形組み合わせたタキキ文
46	SE	185		土師器	坏	回転ヘラ切り底。
47	SE	185	上部	土師器	坏	ほぼ完形。口径15.0cm、器高3.5cm。回転ヘラ切り底。
48	SE	185	上部	黒色土器	甕	内外面黒色に焼す。
49	SE	485	井筒内(外も含む)	土師器	小皿	完形。口径7.6cm、器高1.4cm。回転糸切り底。
50	SE	485	下部	土師器	小皿	完形。口径8.3cm、器高1.3cm。回転糸切り底に板目圧痕が残る。
51	SE	485	上部(一部搅乱含む)	土師器	小皿	完形。口径8.9cm、器高1.1cm。体部の立ち上がりは直に近く、端部は失る。
52	SE	485		土師器	托	内底部を段を有して成形。赤色を呈す。
53	SE	485	上部(一部搅乱含む)	土師器	托	内底部への段は緩やか。黄灰色を呈す。
54	SE	485	上部(一部搅乱含む)	青磁	坏	内面に細い凹面の溝文を削り出す。
55	SE	485	上部(一部搅乱崩)	陶器	壺	施釉陶器。外面部の剥離下端より下位は無釉、内面拭き取り。
56	SE	485		土師器	土鍋	外面部板張、内面横位のハケメ。
57	SE	485		瓦	軒丸瓦	花卉文の瓦当。
58	SE	485	上部(一部搅乱含む)	瓦	軒丸瓦	複数。中房は中央蓮子が大きい1+6か。大宰府型式217に近い。
59	SE	485	上部(一部搅乱崩)	土師器	円盤	遊具か。両面にミダリ、周縁を円形に削り取る。
60	SE	485	上部(一部搅乱含む)	土製品	不明	横位の条線とわざかな横位の門線を作る。
61	SE	605		青白磁	合子	内面に草花文の壓押し。器厚は2mm程度で薄い。
62	SE	605	井筒内底下	瓦	軒丸瓦	58と同蓋。
63	SE	606 (373)	下部	土師器	小皿	完形。口径9.2~9.8cm。
64	SE	606	(153) 上部 SX131 合む129(包含層)	青磁	碗	小碗。無文。疊付、外底部は露胎。

65	SE	606	(153) 上部。SX131含む129 (包含層)	青磁	环か	外面蓮弁、内面に双魚文を貼り付け。
66	SE	606	(153) 上部。SX131含む129 (包含層)	陶器	壺	褐釉陶器。耳壺。
67	SE	485-154		土師器	小皿	口径8.8cm、器高1.5cm。完形。系以外の外底部に板状圧痕が残る。
68	SE	514	掘方下部	土師器	墨青土器	土師器壺の外外面に墨書きする。内面は絵画か。
69	SE	514	SE515、514との切り合い部	白磁	皿	内面見込みの袖を輪状に剥ぎ取る。大宰府Ⅲ-1
70	SE	514	上部～中	白磁	壺	口禿。大宰府Ⅳ類
71	SE	514	上部～中	青磁	壺	端が無い幅広い蓮弁を片彫り。
72	SE	514	(切り合い含む)	青白磁	瓶	草花文を片彫りと輪削で描く。
73	SE	514	上部～中	綠釉陶器壺	壺	外面の高台まで施釉。
74	SE	514		土製品	人形	素焼き人形の頭部か。
75	SE	514		瓦	平瓦	凸面の斜格子はナデによって浅い。凹面に桶板の圧痕が残るが布目はナデ消されている。
76	SE	514	最下 (井筒内)	瓦	軒丸瓦	巴文。器面、輪上ともに赤色を呈した酸化焰焼成。
77	SE	515	334	土師器	小皿	完形。回転ヘラ切り底の中央に板状圧痕。口径9.7cm、器高1.8cm。
78	SE	515	(334) 墓土含む	青白磁	合子	草花文の壓押し。
79	SE	335	SE515と514との切合部	瓦	軒丸瓦	巴文の瓦當。赤色を呈す。
80	SE	515	(切り合) 上部SE514含む	瓦	軒丸瓦	花卉文の瓦当。
81	SE	516	(598) 井筒 (土器集中)	土師器	小皿	完形。口径7.4cm、器高1.5cm。回転糸切り底。板目なし。
82	SE	516	(598) 井筒 (土器集中)	土師器	小皿	完形。口径7.5cm、器高1.4cm。回転糸切り底。板目なし。
83	SE	516	(598) 井筒 (土器集中)	土師器	小皿	完形。口径9cm、器高1.5cm。回転糸切り底。板目なし。
84	SE	516	(598) 井筒 (土器集中)	土師器	小皿	ほぼ完形。口径9.1cm、器高1.2cm。回転ヘラ切り底。板目なし。
85	SE	516	(598) 井筒 (土器集中)	土師器	环	完形。口径11.9cm、器高3cm。回転糸切り底。板目なし。
86	SE	516	(598) 井筒 (土器集中)	土師器	环	口径12cm、器高2.9cm。回転糸切り底。板目なし。口縁端部に煤付着。
87	SE	516	(598) 井筒 (土器集中)	土師器	环	口径11.6cm、器高3.0cm。外底部に板目の平行本目が明瞭に残る。
88	SE	516	下部	土師器	环	口径13.5cm、器高2.0cm。回転糸切り底。板目なし。
89	SE	599		黒色土器	碗	内外面焼し。
90	SE	597		青磁	碗	見込みに「玉」のスタンプ文。
91	SE	516	上部 (埋土含む)	瓦	軒丸瓦	巴文。
92	SX	71		白磁	碗	玉縁。大宰府Ⅳ類
93	SX	71	P2 F	白磁	碗	玉縁。大宰府Ⅳ類
94	SX	71		白磁	碗	玉縁。大宰府Ⅳ類
95	SX	71	P2上 + SX71 P-2	白磁	碗	玉縁。大宰府Ⅳ類
96	SX	71		白磁	碗	玉縁。大宰府Ⅳ類
97	SX	71	P2中	白磁	碗	玉縁。大宰府Ⅳ類
98	SK	15	No 4	土師器	皿	口径13.4cm、器高2.8cm。回転糸切り底に細かい平行本目の板状圧痕が残る
99	SK	15	上部 (周辺含む)	土師器	环	ほぼ完形。口径13.3cm、器高2.8cm。回転糸切り底。板目なし。
100	SK	15	上部 (周辺含む)	黒色土器	碗	内外面黒色に焼し。
101	SK	15		瓦	平瓦	全面に桶板の圧痕が残る。凸面にもわずかに桶板圧痕が残る。
102	SK	15	No 4	陶器	盤	黄褐色。内面に鉄斑。大宰府 II-1b類
103	SK	191		土師器	托	口径11.7cm、黃白色を呈す。
104	SK	191		瓦	軒丸瓦	大宰府分類132。全体に粗雜で丸瓦凸面は粗く強いナデ。
105		197	C + SD198 + SX197 上部 (検出)	白磁	皿	大宰府分類V-2a
106		197	C + SX197 + SX197 上部 (検出)	青磁	碗	内済した立ち上がり。緑色の強い袖色。蓋付以外は施釉。見込みと骨付に粘土の目跡。
107		311	(包含層 II面下部)	黒色土器	碗	内里土器。口縁部近くで外済する。
108	SX	319		瓦	軒平瓦	大宰府分類66A。中心軸りに单輪状文。均整唐草文
109	SX	392	-A	土師器	小皿	口径9.6cm、器高1.5cm。体部中位で屈曲。回転ヘラ切り底に板目圧痕。
110	SX	392	-B	土師器	小皿	口径9.6cm、器高1.5cm。体部中位で屈曲。回転糸切り底に板目圧痕。
111	SX	392	-A	土師器	小皿	口径8.6cm、器高1cm。回転糸切り底に板目圧痕。
112	SX	392	-A	土師器	环	口径15.0cm、器高3.9cm。口縁部近くで外反。底部に板目。
113	SX	392	-A	土師器	环	完形。口径4.6cm、器高3.4cm。口縁部近くで外反。板目なし。
114	SE	482	上部 (別ピット)	土師器	小皿	口径8.9cm、器高1.3cm。系以外に板目が残る。葉が付着。
115	SK	501		白磁	碗	大宰府分類2。直口縁。内面見込みを深く輪状に袖を搔き取る。
116	SK	501		綠釉陶器	不明	蓋、合子等の蓋受けと返り部分の位置と思われる。内面は露胎。
117	SK	502		瓦	軒平瓦	巴文の間に3本に分岐した更級を有す。
118	SK	502		埴堀		小形の陶形。外面に青白ガラスが薄い膜状に付着、内面は炭がガラス化。
119	SX	642		土師器	托	内外面の一部に煤付着。
120	SX	791		土師器	碗	完形。内面中心が一段凹む。

121	SX	791		黒色土器	輪	完形。内黒土器。内底部を同方向に、体部との境を最後に斜位に磨く。
122	SK	731		土師器	輪	口縁部近くが外溝する。山本編年_Ⅰ期。
123	SX	4 檢出		青磁	香炉	香炉の脚部か。獸脚。
124	SX	9 131		青磁		外底部が露船であるは施釉。底部に3箇所断面三角形の貼り付けがある。
125	SX	44 周辺2面掘下げ		陶器	水注	外面露船。内面施釉。注口は8面に面取り。
126	SX	107		白磁	輪	大宰府分類N-2a
127	SX	107		青磁	輪	越州窯青磁。内面に花文を差し彫り。外底部高台内に目跡が残る。
128	SX	118		瓦質	火舎	外面に×の列点スタンプを施す。
129		153 土部 SX131含む 129包含層		白磁	輪	外面に花弁状に鋸歯に細かい間隔で片彫り。軸色は純白に近い。高台近くの下段露船
130	SP	130		青磁	合子	並 天井部に草花文の型おこし
131	SX	131		瓦	軒平瓦	細凸線に細かい唐草文が展開する。砂質の胎土
132	SX	160		土師器	小皿	口径9.2cm、器高11.6cm。糸切り底に板目。
133	SP	245		土師器	小皿	完形。口径9.5cm、器高13cm。回転ヘラ切り底に板目。内面はヨコナデの起伏完形。が大きくナデが加えられている。
134	SP	245		土師器	小皿	完形。口径9.2cm、器高16cm。回転ヘラ切り底に板目。内面のヨコナデによる起伏大きい。
135	SP	245		土師器	坏	口径15.1cm、器高3.6cm。内面体部はミガキ。外底部は回転ヘラ切り。
136	SP	237		土師器	小皿	口径9.2cm、器高16cm。回転ヘラ切り底に板目。内面のヨコナデによる起伏が大き。
137	SP	250		土師器	小皿	口径9.2cm、器高13cm。回転ヘラ切り底に板目（平行木目）。内底部に強いナデ。
138		303		白磁	皿	大宰府分類N-2b。輪花と白毫を有す。
139	SP	484		土師器	托	高台が長く、口縁部をわずかに外溝させ肥厚させる。
140	SP	652		土師器	輪	体部下位に縦やかな屈曲を有す。全体に厚い。
141	SP	431		土製品	土鍼	完形。黒色を呈す。
142	SP	23		瓦	軒丸瓦	大宰府分類666A。瓦当は本調査の108と同じであるが接合方法が異なる。凸面にさわかに小さい斜格子のタキ。
143	SP	64		瓦	軒平瓦	中国系。指揮さズ部位に布目。凹面は布目ナデ消し。凸面に細かいハケヌ。
144	SP	64		瓦	瓦当	瓦当の花文は長めの梅舟3、短い梅舟2、広めの単舟1、中房は文素。黒色を呈す。
145	SP	170 周辺		土製品	土鍼	体部は膨らます。柱状に近い。
146	SP	235		土製品	土鍼	赤褐色を呈す。中位が膨らむ。
147	SP	207		須恵器	甕	外腹は平行タタキ。内面は同心円文と波状文の組み合わせ。
148		69 (包含層)		白磁	水注	水注の注口
149		81 (包含層) II面掘下げ (2面下部)		土製品	土鍼	黒色を呈す。長さ4.3cm。
150		81 (包含層) (2面掘下げ)		土製品	土鍼	長さ4.1cm。
151		156		土師器	小皿	口径8.9cm、器高1.3cm。糸切り底。
152		156		土師器	小皿	口径8.9cm、器高13cm。糸切り底。
153		156		土師器	坏	復元口径16.6cm、器高2.7cm。糸切り底に板目が残る。
154		111 (包含層) II面掘下げ		瓦	平瓦	凸面二重線の斜格子、凹面幅4cmの桶板状圧痕（模骨痕）。ナデ調整、布目なし。
155		126 (略ギヨ)		瓦	軒丸瓦	中国系、花卉文。
156		395 (包含層) 明褐色砂		土製品	土鍼	径1.7cmの球体。
157		407 黒色包含層		青磁		龍泉窯系。鏡彫りの平面的な蓮弁文。登付から底部以外は施釉。底部に粘土付着。
158		608 (包含層) III面上部		土師器	輪	高台から底部にかけて黒化。内面ヨコナデ後斜位にナデ。
159		407 黒色包含層		陶器	甕	大宰府分類11類。内面に同心円文の当具痕を有す。
160		462 黒色包含層		土師器	坏	多角形に割り、径8mmの穴を穿つ。
161		北半II面柱穴		墨書き土		復元口径8cm、糸切り底に板目。外底部に墨書きを有す。字体不明。練習用か。
162		II面検出面		土師器	小皿	口径9.5cm、器高1.5cm。回転ヘラ切り底に幅5mmの等間隔の板目状压痕。
163		南半黒色土		土師器	托	口径12.4cm。上面は水平に近い。
164		棗(黒色土) 清掃		土師器	小桜	復原口径9.5cm、器高3.4cm、淡黃白色を呈し、胎土は精良堅緻。
165		南半黒色土 II面掘り下げ		合子	身	底部と受部は露胎。
166		南半黒色土		土師器	納	外面に落葉等く有す。口縁部にヨコナデによる条線がみられる。
167		南半黒色土 II面掘り下げ		瓦	軒丸瓦	大宰府分類132に近い。外面赤色を呈す。
168		南半黒色土 II面掘り下げ		瓦	軒丸瓦	38に近いが中央進子は小さい。
169		南半黒色土 II面掘り下げ		瓦	軒丸瓦	弁の輪郭が不明瞭。外区の進子は継長、内区も円形ではなく継に延びる。
170		北半黒色土 II面掘り下げ		瓦	平瓦	内に「大」に近い文字状の略記を有す。
171		II面掘り下げ		土師器	小皿	口径8.5cm、器高1.3cm。板目なし。
172		I面掘り下げ (ユンボ) (黒色土)		土師器	小皿	口径9.0cm、底部は回転ヘラ切り。

173		I面掘下げエンボ(含む黒色土)	土師器	环	復元口径15.4cm、器高3.9cm。
174		I面掘下げ	土師器	环	口径15.2cm、器高3.4cm。回転系切り底。板状压痕あり。
175		I面掘下げ南半	土師器	环	高台。高さ2.7cm。
176		I面掘下げ南半	土師器	环	口径11.6cm、器高2.7cm。回転系切り底。板目なし。口縁部に煤付着。
177		I面掘下げエンボ(含む黒色土)	白磁	皿	大宰府分類Ⅱ-2b。内底部に草花文の印
178		I面掘下げ	土製品	土鍤	復元長3.5cmの小形土鍤。
179		I面掘下げ	土製品	土鍤	復元長4.2cm、最大径11cm。
180		I面掘下げ	土製品	土鍤	長さ4.6cm、最大径15cm。
181		I面掘下げ(エンボ)(黒色土)	瓦器	碗	口径15.8cm、器高5.5cm。体部中位の弱い屈曲から上位は回転を用いたミガキ。
182		I面掘下げエンボ(含む黒色土)	瓦器	碗	ミガキは粗く、体部の屈曲はほとんど無い。
183	SE	(I面掘下げ)	瓦器	碗	器厚で外面のミガキは粗い。外底に指押さえ痕。
184	SE	(I面掘下げ)	青磁	碗	大宰府1-1c。見込みに「田」の印文。疊付4箇所に褐色化した目跡。
185		I面掘下げ	白磁	碗	大宰府V-2a。
186		X= -3, Y=10.7	土師器	脚付壺	弥生終末～古墳初頭。
187		東際 檢出	青白磁	合子 蓋	多角形。天井部に4弁の花文の印。
188		西半 東西鉄	青磁	合子 身	外面の釉の劣化、剥落が著しい。
189		東際検出	土製品	土鍤	長さ2.8cm。
190		ラベルなし	土製品	土鍤	長さ4.1cm。
191		魔土中	土製品	土鍤	長さ4.7cm。
192		I面東側調査区櫛(北)	凡質	足金	脚部。
193		南側検出	土製品	素焼き 削り	近世以降か。
194	527		土師質	印	凸線の三日月形スタンプか。裏面に違い輪の墨書きと十字の線刻。
195	517	[暗渠]	縁胎陶器	鳥形か	褐色の練まった胎土。華南三彩か。
196		東西暗渠埋土	土師器	灯明皿	口径9.2cm。体部が外薄する。縁が広く付着。外底部に5mm幅の板目を残すがナゲが加えられている。
197		東西暗渠埋土	土製品	土鍤	長さ3.6cm。
198		東西暗渠埋土	土師器	环	外底部に5mm幅の板目が残る。
199	SD	201	土師器	皿	呪文か。外面「老」、体部の「後」?が読める。底部は回転ヘラ切りか。
200	SX	160	青白磁	合子	天井部に花文状の複複縦を片彫りする。口縁部は露胎。
S01	SD	6	(壁泥下部)	石器	石鍤 滑石製。上下端に抉りを有す。粗い加工痕が残る。
S02	SD	6	(下部)	石器	垂角晶 滑石製。有孔円盤。
S03	SD	512	上部	石器	滑石製。中央にやや斜めに穿たれた孔を有す。側面にも貫通しない小孔を1箇所有す。
S04	SD	68	石器	滑石製。	滑石製。小型器の口縁部を切断したような形状。
S05	SD	512	上部	石器	滑石製。鏡のミニチュア。
S06	SE	485	周辺	石器	不明 滑石製。方形形容図。
S07	SK	15	石器	分削形 滑石製。	平たく石織の再加工と思われる。
S08	SK	15	上部(側刃含む)	石器	分削形 砂岩製。方柱状の1面に研いだ擦痕が残る。
S09	SK	501	石器	球	砂岩製。 球形。
S10	SX	53	石器	選具	滑石製。石織片を円盤状に再加工。
S11	SP	404	石器	印か	滑石製。スタンプか。背面に片彫り状の刻みを有す。
S12	SP	391	石器	不明	滑石製。舟形状に湾曲した削りミガキを施す。
S13		81(包含層) 2面掘り下げ	石器	石鍤	艇型の方形突起状の縁。補修孔有り。
S14		黒色包含層	石器	不明	滑石製。内法径15cm、深さ1.7cmの孔を連結。外面に凸縦状の削り残しがある。
S15		北半黒色土下部	石器	不明	底部に煤付着。石鍤の転用か。
S16		北半II面側下黒色土	石器	不明	貞岩製。上部に段(テラス)を有した方形の削り込み。
S17		I面掘り下げ 南半	石器	砾石	砂岩製。遺存する4面の船底が下面。
S18		II区南側黒色土	石器	印か	滑石製。縁が一部付着し、石鍤の再加工。舟形につまみが付いた形状
S19		搅乱 (SX09内)	石器	印か	スタンプの未製品か。
S20		以前調査客土	石器	堆か	上部に1箇所径6mmの孔を有す。重さ618g。
M1	SE	594	鉄器	鉄鍤	柳葉形の嵌身。
M2		南半II面側下黒色土掘り下げ	鉄器	鉄鍤	柳葉形の嵌身。
M3	SX	470	鉄器	刀子	刀身の先端は欠損。
M4	SK	501	鋼器	切羽	縫5.4cm、厚さは1mm以下。
M5	包含層	69	II面掘り下げ	鉄器	筋鍤車 筋輪は湾曲し、心棒も曲がっている。
M6	SP	246	鉄器	金具	等の吊り金具。
M7	SK	344	銅器	銅鏡	断面三角形の外縁。素文か。
M8	SP	424	鉄器	釣針	直に折り曲げ、先端を返す。

## IV 終わりに

### 1. 出土遺物の時期と変遷

出土遺物からみた時期は10世紀後半代から15世紀後半代におさまる。その中で土師皿出土状況(P-41)のおよその傾向からも判るように特に12世紀中葉を中心とした時期の出土遺物が多く見受けられる。

「II位置と歴史的環境」で概述したように菅崎宮の創建からやや遅れた時期から始まり、菅崎宮が大宰府の府領から石清水八幡宮の別宮となっていく時期と重なる。輸入陶磁器もこの時期のものが多く、活発な対外貿易による繁栄が想像される。

出土瓦の時期は編年による細かな時期が未だ明らかではないので詳細については述べられないが概ね11世紀以降から12世紀代に集中していると思われる。下限については不明であるが、北側に近接した2次調査でみられた15世紀代にはいると思われる後出の瓦はみられない。

### 2. 検出された遺構の層位と時期

Iで記した10世紀後半～15世紀後半代の遺構は第II面の黒色包含層（整地層か）で検出される。前章でも記した通り、第III面の褐色砂層で検出された多くの柱穴や土壤のプランは判別が困難であったがおそらく第II面から掘り込まれていると思われる。

しかし、15世紀後半代とみられるSD07の上部溝の下底が第II面から深さ40cm程度であったことや第II面の黒色土上面に本来は柱穴の下底に設置されていたと考えられる礎板の平石が多く検出されたことから、これらの遺構が掘り込まれた面はさらに上部にあったことは明らかである。

遺構面がこのように前代と大きく異なる時期は上述のように15世紀後半以前、第II面を明瞭に掘り込んでいたことが明らかなSE03などの井戸群の下限時期である14世紀初頭前後の可能性がある。この時期は13世紀後半代の元寇による町屋の破壊と復興との関連も考える必要がある。以後、あまり生活面のレベルは変わらなかった為か、比較的新しい（現代に近い可能性がある）暗渠が縦横に掘り込まれた検出面が第II面の直上近くに堆積している。

このように本調査地点のような地山の砂丘面が低いところでは特に中世後半期の遺構面のレベルが上部にあり、近世以降の生活遺構と重なりあってい可能性が大きい。以前調査した38次の調査区壁面の観察からも確認した経験がある。従って、時間的な制約で地山に近いレベルから遺構検出をはじめ既往調査の近世面とした層位や遺構の時期的な変遷には十分な検討を要す。

### 3. 町割りとSD07の方位

第II章で記したように本調査地点の北側道路を境にかつて郡境があり、現在の町並みの方位も異にしている。調査で検出された柱穴の並びや比較的古い時期と考えられるSD202、203の方位は現在の町並みとはほぼ合致している。しかし、SD07の方位はやや東に振れ方位を異にしているが、郡境の設置との関連については現段階では判らない。

### 4. 遺構性格について

本調査地点の北側に位置した2次調査では整然と区画した溝や建物地業の敷石が検出され、さらに11～15世紀代の瓦当片が比較的多く出土している。本調査でも瓦当片や輸入陶磁器が多く出土していることから、菅崎宮に関連した施設の可能性がある。また、中国産の瓦といわれる花卉文（草花文）や押圧文瓦が出土したことは注目される。

報告書抄録



## 箱崎 34

—箱崎遺跡第54次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第998集

2008年（平成20）年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8-1  
☎ (092) 711-4667

印刷 株式会社タマキ印刷  
福岡市中央区荒津一丁目4-27  
☎ (092) 771-1551